

つとかう答へるに相違ありません。『神様、あなたがわたしを創つて下さつたといふ事と同様に、賢人の石があるといふ事は、眞實でございます。わたしは必ずそれを見つけてます！』
レオナルドはもう反駁もしなければ憤慨もせず、たゞ好奇心をもつて聞いてゐた。
やがて、この祕術に於ける悪魔の助けといふ事に、話が移つて行つた時、錬金術師はさも輕蔑したやうな微笑を浮かべながら、悪魔は自然界ぜんたいの中で最も憐れな創造物で、これ以上弱いものは、世界ぢうに一つもないと云つた。老人はたゞ人智の威力のみを信じてゐて、科學に取つては一切が可能だと斷言した。

それから不意に、何やら面白い、可愛い物でも思ひ出したやうに、彼はレオナルドに向つて、宇宙の元素の精を幾度も見た事があるか、と訊ねた。畫家が、一度も見た事がないと白狀すると、ガレオットはまたしても本當にしなかつた。そして、さも満足さうな様子で、火蛇サラムンドラは指一本半くらゐの大きさで、斑の多い、がさ／＼した、瘡せて細長い體をしてゐるし、氣仙シムルッはまるで大空のやうに、透明な瑠璃色をしてゐる、などと説明するのであつた。彼はまた水精ニムフや、水の中に住む波女ウヰヂナや、地下の矮人グノムや、植物の精のドゥルダルや、寶石の中に住む珍奇なヂエメイなどの物語をした。

「實際、かういふ者どもがどれくらゐ可愛いか、」彼は物語を結んだ。「とても傳へることが出来ないほどですよ！……」

「さういふ元素の精は、どうして選ばれた人の目にだけ見えて、みんなの前に現はれないのです？」

「どうして皆の前へ現はれることが出来ますか？ 彼らは淫蕩な人間や、酒飲みや、大食漢や、さういふ粗野な連中を恐れて、小兒のやうな單純無垢を愛してゐるのです。彼らは怨恨や譎詐のない所にのみ住んでゐます。つまり、野の獸みたいに臆病になつて、人間の視線に觸れないやうに、自分の生れた元素の中へ隠れて了ふのです。」

老人の顔は夢みるやうな、優しい微笑に照された。

『何といふ奇妙な、憐れな、そして愛すべき人間だらう！』とレオナルドは考へた。そして、もう相手の愚にも付かぬ譎言たごごに憤慨もせず、子供でも相手にするやうに、氣を付けて話しながら、何でも勝手な祕密の所有者に、このレオナルドを決めるがよい、たゞ／＼ガレオットを失望させないために、その役割りを演じよう、といふ氣になつた。

二人は親友として別れた。

レオナルドが去つた後、錬金術師はまたもや『ギーナスの油』の新しい實驗に没頭した。

六

そのとき、ちやうど實驗室の下に當る部屋の大きな爐の前に、主婦のシドニヤ婆さんと、カッサンドラが坐つてゐた。

炎々と燃える柴の束の上には、鐵の鍋がかゝつてゐて、大蕪じんじくと蕪の入つた晩食の汁スープが、その中

でぐつ／＼煮えてゐた。皺だらけの指を單調に動かしながら、老婆は麻緒を引伸ばしては、糸を擦つてゐた。紡錘はくる／＼廻りながら、上つたり下がつたりしてゐる。カッサンドラは、糸を紡ぐ叔母の姿を見ながら、ぼんやり考へ續けた——いつも／＼同じ事だ。今日も昨日と同じで、明日もまた今日と同じなのだ。蟀がうたつて、二十日鼠が物をかじる音を立て、紡錘がぶん／＼唸つて、乾いた草の莖がばち／＼と爆ぜ、大蕪と蕪の匂ひがする。それからまた、老婆はいつもと一言一句ちがはない言葉で、まるで切れない鋸で木を挽くやうに、小言を云ひ續けてゐる。

シドニヤは世間でこそ、家の葡萄酒に金の入つた壺を埋めてゐる、などと噂されてゐるけれど、それは出たら目で、本當は貧しい女である。ガレオットが身上を潰して了つたのだ。叔父と姪とが二人が／＼で、彼女の足手まとひになつてゐるのだ。彼女はたゞその善良な心のために、二人の世話をして養つてゐるのである。しかし、カッサンドラはもう子供でないから、さきの事も考へなければならぬ。叔父が死んだら、その後は乞食同様の身の上になつて了ふのだ。なぜ彼女はあのアビアテルガッソ生れの、金持の馬商人の所へ嫁入りしてはならないのだらう？ あの男はもう以前から、結婚の申込みをしてゐるではないか。尤も、男は大して若いといふ年ではない、けれどその代り分別があつて、信心が厚い。あの男には穀倉もあれば、水車小屋もあり、新しい搾め場つきの橄欖の畑もある。つまり、神様が彼女に幸福を送つて下さるのだ。それなのに、なぜぐ／＼してゐるのだらう？ この上まだどんな運がほしいといふのだらう？

カッサンドラはぢつと耳を傾けてゐる中に、堪へ難い憂愁が大きな塊のやうに、喉もとへ込み

上げて来て、息はつまり蟀谷は搾め付けられて、彼女は泣き出したくなつた。ちやうど肉體の痛みと同じやうに、倦怠のために喚き叫びたくなつた。

老婆は、湯氣の立つてゐる蕪を、鍋の中から一つ取出して、尖つた木の箸に突き刺しながら、庖丁で皮を剥き、眞つ赤な濃い葡萄酒のソースをかけて、齒のない口をぴちや／＼鳴らしながら、食ひにかゝつた。

若い娘は従順な絶望を表はしながら、癖になつた身振りで伸びをして、細い蒼白い指を頭の上で揉みしだくのであつた。

晩食の後で、眠氣のさしたシドニヤは、まるで懶げなパルカ(命の老女神)のやうに、頭をふら／＼と揺り、目をしば／＼させ始めた。そして、甲高い聲もだるさうになり、馬商人の噂もしどろもどろになつて来た。その時カッサンドラはそつと着物の下から、父ルイジイに貰つた護符——細い紐の附いた寶石を取出した。石は彼女の肌で暖まつてゐた。彼女はそれを目の前へ差上げながら、爐の火に透かして、バッカスの像に見入り始めた。透明な紫水晶の暗みを帯びた瑠璃色の輝きの中に、片手に香柏の杖を持ち、片手に葡萄酒の房を持つた若きバッカスが、幻のやうに彼女の前に現はれた。一匹の豹が飛んで来て、舌で葡萄酒の房を嘗めようとしてゐる。カッサンドラの胸は、美しい神に對する愛で充たされた。

彼女はほつと溜息をついて、護符を隠すと、臆病さうに云ひ出した。

「シドニヤ叔母さん、今夜バルコ・ヂ・フェララとベネゼントで集りがあるのよ……叔母さん、

後生だから連れて行つて頂戴！ 踊りなんかしなくてもいいのよ、一目覗いて見たら、すぐ引つ返しませう。わたし何でも、叔母さんのお望み通りにしてよ。馬商人にお金を出さすやうにだつて仕むけるわ。たゞ飛びたいのよ、すぐ、今すぐ飛びたいのよ！」

彼女の目の中には、氣ちがひめいた希望が輝いてゐた。老婆はちつと彼女を見つめてゐたが、突然、紫がかつた皺だらけの唇が廣くあいて、たつた一本のこつた、牙のやうな黄色い齒を剥き出した。彼女の顔は物凄く、うき／＼として來た。

「行きたいかい？」と彼女は口を切つた。「堪らないほど、え？ だん／＼面白くなつて來たと見えるな？ 本當に厄介な娘だよ！ 毎晩でも飛びたいのだらう、とても我慢できまいて！」

だが、氣を付けなさい、カッサンドラ、お前の心の中には、罪な考へが隠れてるんだよ。わしは今日そんな事なぞ、考へてもゐなかつたが、まあ、本當にお前のお付き合ひにな……」

彼女は悠々と部屋を一周りして、鎧戸をびつたりと閉め切り、隙間をぼろ切れで填め、戸口に鍵を掛け、爐の灯に水をかけて、黒い魔法の肪あぶらで作つた燃えさしの蠟燭をともした後、鋭い匂ひを放つ塗り薬の入つた、素焼の壺を鐵の箱から取出した。彼女はわざとぐ／＼して、分別ありげな落ついた様子を装つたが、烈しい慾望に手は醉漢のやうに慄へ、小さな目は時々どんより濁つて、氣ちがひめいた表情を帯びて來るかと思ふと、時にまるで赤熱した炭火のやうに、燃え立つて來るのであつた。カッサンドラは部屋の眞ん中へ、麵麩の捏粉を醱酵させるのに使ふ大きな桶を、二つ引つ張り出した。

支度が終ると、シドニヤは着物を脱いで、眞つ裸になつた。そして、桶と桶の間に壺を置いて、一方の桶に入つた爐箒へ馬乗りうまのりに跨がり、壺の中の肪あぶらつこい緑がかつた薬を、體からだちうへ塗り始めた。魔法の飛翔に使ふこの薬は、毒高どくたか苜、沼三つ葉、毒人蔘、茄子、蔓陀羅華の根、催眠用の罌粟、菲沃斯、蛇の血、まだ洗禮を受けない魔法師に苦しめられた子供の膏——かういふ物で作られるのであつた。

カッサンドラは、醜い老女の裸體を見たくないで、顔をそむけた。けれども、最後の一瞬間に、自分があんなに望んでゐた物が、避けることの出來ないほど間近く迫つて來た時、彼女の心の中に嫌惡の念が湧き上つた。

「さあ／＼、何をぐ／＼してゐるんだい？」老いたる魔女は、桶の中に蹲しゃがみながら、かうぼやいた。「自分で急ぎ立てて置きながら、今となつて、また氣紛れを起してゐるよ。わしは一人ぢや飛ばないよ。さあ、着物をお脱ぎ！」

「今すぐよ。ねえ、叔母さん、あかりを消して頂戴。わたし明るい處ぢや出來ないんですもの……」

「へん、お上品な事だ！ 山へ行つたら、恥かしいなどと思はない癖に……」
彼女は魔法の習慣で、左の手で十字を切り（悪魔の意を迎へるために、わざと冒瀆な振舞ひをするのであつた）、蠟燭を消した。若い娘は着物を脱いだが、下の襦袢だけは取らなかつた。それから桶の中へ膝を突いて、忙しげに薬を塗り始めた。

くら闇の中で、老婆のぶつ／＼と咳く聲が聞えた。それは意味もない、ちぎれ／＼な咒文であつた。

「エメン、ヘタン、エメン、ヘタン。パルト、パールベリト、アスタロト、助け給へ！ アゴラ、アゴラ、パトリカ、助け給へ！」

カッサンドラは、強烈な魔法の毒薬の匂ひを、貪るやうに吸ひ込んだ。體の皮膚は燃えるやうになつて、目がまはりさうな氣持がした。快い寒けが背筋を走つて、赤や青の環が纏れ合ひながら、目の前をふは／＼と流れた。すると、不意に勝誇つたやうな甲高いシドニヤの叫び聲が、まるで遠くの方から傳つて来るやうに響いた。

「ハル！ ハル！ 下から上へ、少しも物にさはらずに！」

八

カッサンドラは爐の煙突から、黒い山羊に跨がつて飛び出した。柔い毛があらはな足に快い感觸を與へる。歡喜の念が胸を充たして、彼女は大空に沈んで行く燕のやうに、息をつまらせながら、叫ぶのであつた。

「ハル！ ハル！ 下から上へ、少しも物に觸らずに！ 飛べ！ 飛べ！」

素頭のまゝで眞裸の醜いシドニヤ叔母は、爐箒に跨がりながら、彼女と並らんで疾驅した。二人は矢のやうに飛んだ。二人の體に劈かれる空氣は、まるで旋風のやうに、耳もとでひうひうと鳴つた。

うと鳴つた。

「北へ！ 北へ！」從順な馬のやうに、箒の方向を轉じながら、老婆はかう叫んだ。

カッサンドラは飛ぶのに夢中であつた。

『あの機械學者の、レオナルド・ダ・ヴィンチの飛行機なんか、憐れなものだ！』不意に彼女はこんな事を思ひ出した。すると、一そう愉快になつて來た。

ある時は高く高く上へ昇つた。黒雲が彼女の足下に重なり合つて、その中で青い稻妻が慄へてゐると、上の方には空が美しく晴れ渡つて、大きな、眞ん圓い、まるで挽き臼のやうな満月が、煌々と照つてゐる。それが、手を延ばせば觸りさうなほど、ちか／＼と見えるのであつた。

ある時はまた曲つた角を擱へて、山羊を下の方へ向けながら、まるで深淵へ落て行く石ころのやうに、まつしぐらに飛びおりても見た。

「どこへ、どこへ行くのだ？ 頸の骨を折つて了ふぢやないか！ 氣でもちがつたのか、仕樣のない娘だなあ！」シドニヤが、やつとの事で後からついて來ながら、かう喚くのであつた。

やがて、二人は地上に近く飛び始めた。眠たげな草が、沼の上でさら／＼音を立て、鬼火が二人の行く手を照した。そして薄青い朽ち木が、ちら／＼と現はれては消えた。深い森の中では、木兎や五位鷲や梟などが、訴へるやうに鳴き交はしてゐた。

透明な氷の塊りを月光に輝かしてゐる、アルプスの頂きを越えて、二人は海面へ下つて行つた。カッサンドラは手で水を掬つて、上へ撥ねあげながら、青玉のやうな雫に見惚れるのであつた。

飛行は刻一刻と速くなつて来て、道づれも次第に多くなつて来た。胡麻鹽髻のもじや／＼した魔法使が、手桶に乗つてゐるかと思ふと、シレヌス(酒神の從者)のやうに赤い顔をして、腹の大きい陽氣さうな僧が、火箸に乗つてゐるし、年のころ十ばかりの、無邪氣な顔に亞麻色の髪をした少女が、箒に跨がつてゐるかと思ふと、まだ若い赤毛の人喰ひ魔女が眞裸で、ぶう／＼鼻を鳴らす牡豚に乗つてゐたり、そのほか様々な異形(いさま)のものが無數にゐた。

「皆さんどこから見えたね？」とシドニヤは聲を掛けた。

「希臘のカンヂイ島からだ！」

またほかの者は口々に、

「ブレンチャ(愛蘭西南海岸の島嶼)からだ！ ブロッケン(獨逸ハルツ山の最高峰)からだ！ ミランドラの傍のサラダッ

チイからだ！ ベネエント(伊太利カムパニア平原の地方)からだ！ ノルチャからだ！」

「どこへ行かつしやる？」

「ビテルンだ！ ビテルンだ！ あすこで山羊大王が、婚禮の祝ひをしてござるのだ。さあ飛べ、飛べ！ みんなお祝ひに集らうよ！」

もう今はまるで鴉のやうに群をなして、彼らは暗愴たる平野の上を疾走するのであつた。

月は霧を透かして紫色に見える。遙かにたつた一つ、村の寺院の十字架が輝き始めた。と、例の豚に騎つてゐた赤毛の魔女が、痛走つた聲を立てながら、寺に飛びかゝつて、大きな鐘を撈ぎ取ると、力任せに沼の中へ叩き込んだ。鐘が隣れつばい響きを立てながら、泥の中へ沈んだ時、

彼女はまるで吠えるやうな聲で、から／＼と笑ひ出した。箒に跨がつた亞麻色の髪の少女は、さもいたづららしく手を拍いた。

八

月は雲の蔭に隠れた。蠟を振ちて作つた緑色の把火(たいまつ)が、稻妻のやうに煌々と、青い焰を立ててゐる中で、雪のやうに白白聖の山腹を、躍り狂ふ魔女の炭かと黒い大きな影が、纏れたり解けたりしながら、這ひ廻つてゐた。

「ハル！ ハル！ 安息日だ、安息日だ！ 右から左へ、右から左へ！」

大岩の上に泰然と坐つてゐる『夜の山羊』——Hyrens Nocturnus——の周りを、ちやうど秋の黒い朽ち葉のやうな、幾千とも知れぬ魔女の影が、始めもなければ終りもなく、踊りめぐつてゐる。

「ハル！ ハル！ 『夜の山羊』に榮えあれ！ ビテルンの玉に榮えあれ！ わし等の難儀はみんなもう濟んで了つた。悦べ、悦べ！」

死人の骨を剔つて作つた笛が、細いしや嘎れた聲を立てると、首吊り人の皮を張つて狼の尻尾で叩く太鼓が、『トッパ、トッパ、トッパ』と規則たゞしく陰に籠もつた音を立ててゐる。幾つかの大きな釜の中には、恐ろしい喰べ物がぐつ／＼煮えてゐる。こゝの主は鹽を嫌ふので、鹽氣はないけれど、それは何とも云へない美味な食物であつた。

また方々に都合の好きさうな所で、様々な戀の戯れが行はれてゐた。娘は父と、兄は妹と、狼に憑かれた目の青い氣取り屋の黒猫は、百合の花のやうに細せた蒼白いおとなしい娘と、蜘蛛みたいな灰色をして、どこが顔とも分からぬ全身ごそくした夢魔は、いやらしくにた／＼齒を剥いてゐる尼と——かうした見るも忌はしい男女の組が、到るところでうよく／＼蠢めてゐる。愚かしい人の好きさうな顔つきに、白い肪ぎつた體をした魔法使の大女が、母親らしい愛の籠もつた微笑を浮かべながら、新しく生れた二人の子供に、乳を吞ませてゐる。貪婪な惡魔の子らは、だらりと下がつた母親の乳房に、體をすり付けながら、大きな音を立てて、ごく／＼乳を飲んでゐる。

まだ祝祭に仲間入りの出来ない三歳の子供らは、野原のはじの方で、ぶつ／＼だらけの肌をした、墓の群を牧つてゐた。墓は皆はでやかな眞紅の服を着て、首に小さな鈴をつけてゐるが、みな聖餐で養はれて、食ひ肥つてゐる。

「さあ、行つて踊らう！」叔母のシドニヤはもどかしげに、カッサンドラを急ぎ立てた。

「馬商人が見つけてよ！」と娘は笑ひながら云つた。

「あんな馬商人なんか、犬でも食つて了ふがいゝ！」と老婆は答へた。

二人は踊りの圈へ飛び込んだ。忽ち、どよめきと、咆哮と、叫聲と、悲鳴と、哄笑の入り交つた、嵐のやうな人波が、二人の女を巻き込んで、引つさらつて行つた。

「ハル！ ハル！ 右から左へ！ 右から左へ！」

誰かしら、まるで海象のやうな長い濡れた鬚で、後からカッサンドラの頸を突くと、誰のやら細くて固い尻尾が、前の方から彼女の體を擦つた。誰かしら厚かましく、いやといふほど掴る者もあれば、厭らしいお愛想を囁きながら、彼女の耳を噛む者もあつた。けれど彼女はさからはなかつた。周囲の状態が悪くなればなるほど、いゝ氣持であつた。恐ろしければ恐ろしいほど面白かつた。

突然、一同はびつたり足を停めて、まるで釘づけにされたやうに、ちつとその場へ立ち竦んだ。

『未知の人』の坐つてゐる、恐怖に取巻かれた黒い臺座から、地震の轟きのやうな鈍い聲が、響き渡つたのである。

「皆わしの贈物を受けるがよい。つつましき者はわしの力を、へりくだれる者はわしの誇りを、こゝろ貧しき者はわしの知識を、魂の惱める者はわしの悦びを受けるがよい！」

神聖宗教裁判の上官であり、同時に惡魔の彌撒を務める魔法師の頭である、品のよい白髪の老人が、物々しい調子でかう云つた。

[Sanctificetur nomen tuum per universum mundum, et libera nos ab omni malo !

(汝の名を全世界に輝かしめ、)お拜み申せ、お拜み申せ、忠實なる家來ども！

一同はそこに突つ伏して、教曾讚美歌風の冒瀆な合唱を始めた。

[Credo in Deum patrem Iuciferum, que creavit coelum et terram. Et in filium ejus

Belzebub. (天と地を造り給ひし惡魔の父なる大神)]

最後の響きが鳴りやんで、再び静寂が邊りを領した時、またもやかな地震の轟きに似た聲が、響き渡つた。

「わしの約束の花嫁を連れて来い。清淨無垢なわしの女鳩めんどを連れて来い！」
祭司の頭は訊ねた。

「あなたの花嫁は、清淨無垢なあなたあなたの女鳩は、何といふ名でございますか？」
「カッサンドラだ！ カッサンドラだ！」と答へる聲が響いた。

自分の名を聞くと、魔女は血管の血が一時に凍り、頭の毛が一本々々立つやうな氣がした。

「カッサンドラ！ カッサンドラ！」と叫ぶ聲が群集の間に起つた。「どこにその女めんどはゐるのだ？ どこに我々の女王はゐるのだ？ Ave, archisponsa Cassandra ! (お花嫁のカッサンドラ)！」

彼女は両手で顔を蔽うて、逃げ出さうとしたが、骨のこつ／＼した指や、長い爪や、觸角や、象のやうな鼻や、毛のざら／＼した蜘蛛のやうな手などが、四方から伸びて彼女を捕へ、下襦袢を撈ぎ取つて、眞裸にしながら、わな／＼と慄へる娘を臺座の方へ引つ張つて行つた。

山羊くさい匂ひと死の冷氣が、むつと彼女の顔に吹き付けた。彼女は見まいと、目を伏せた。そのとき臺座の上の人が、口を開いた。

「こゝへ来い！」

彼女は一しほ低く頭かぶを垂れた。と、自分の足のすぐ傍の闇に輝く、火の十字架が目に入つた。カッサンドラは最後の努力をして、嫌惡の念を征服しながら、一步まへに踏み出して、目前に

立上つた人を見上げた。

と、奇蹟は成就された。

山羊の皮は蛇の衣きぬのやうに脱げ落て、カッサンドラの目の前に、古いオリムピヤの神デオニソスが立ち現はれた。脣には永久のよろこびの微笑を浮べ、片手には香柏シベの杖を差上げ、片手には葡萄の房を持つてゐた。一匹の豹が、その葡萄を嘗めようとして、飛び廻つてゐる。

その瞬間に、惡魔の祭は、神々しいバッカスの祝宴に變つた。年取つた魔女たちは、若々しい酒神の侍女に、醜い惡魔らは山羊の足をした森神サカイに化し、死人の骨みたいな白聖の塊がごろごろしてゐた處には、太陽に照された白大理石の圓柱が聳えて、その間には遠く紺青の海が見透かされた。さうしてカッサンドラは、かなたの雲の上に光りまばゆき希臘ヘラスの神の集りを見たのである。

森神サカイや酒神の侍女たちは、鑊カサを打ち鳴しながら、自分の乳房を小刀ナイフで傷つけて、眞紅の葡萄の汁を金の杯に絞つた上、それを自分の血に交ぜ合はした。そして、踊り狂ひながら、歌ふのであつた。

「デオニソスに光榮あれ！ 偉大なる神々は復活したり！ 復活せる神々に光榮あれ！」
眞裸の青年バッカスは、カッサンドラに向つて抱擁の手を擴げた。その聲は天地を揺する雷いかづちのやうであつた。

「来い、こゝへ来い、わしの花嫁、清淨無垢なわしの女鳩よ！」

カッサンドラは神の抱擁に身を投じた。

九

啼を告げる鶏の聲が聞えた。あたりは一面に霧が罩めて、むつとするやうな煙の氣を含んだ、濕つぽい匂ひが漂つて來た。どこからか無限に遠いかなたから、教會の鐘が傳はつて來る。この音を聞くと同時に、山の上では大混亂が生じた。酒神の侍女は恐ろしい魔女に、山羊のやうな足をした森神は醜い悪魔に、ディオニソス神は『夜の山羊』に——悪臭鼻をつく Hyrcus Nocturnus に變つて了つた。

「さあ、歸らう、歸らう！ 逃げろ、飛べ！」

「わしの火箸を盗んだあ！」シレヌスのやうに大きな腹をした僧侶は、夢中になつてかう叫びながら、まるで火が付いたやうに飛び廻つてゐた。

「牡豚、牡豚、わしの所へ來い！」赤毛の裸女は、明け方の濕氣に身を縮めて、咳をしながら、喚き立てるのであつた。

西に傾いた月は、雲の陰から浮き出した。そのどす赤い光りの中に、おぢ氣ついた魔女どもが、あとからあとから群をなして、黒い蠅のやうに、白聖の山を飛び去るのが見透かされた。

「ハル、ハル！ 下から上へ、少しも物に觸らずに！ 逃げろ、飛べ！」

『夜の山羊』は悲しさうな啼き聲を立てて、息の窒るやうな硫黄の臭氣をあたりへ擴げながら、

大地の隙間へ落込んで了つた。

教會の鐘が響き渡つた。

一〇

カッサンドラは、エルチエル門に近い小屋の、薄暗い部屋の床の上で、我に返つた。

まるで宿醉でもしたやうに胸が悪く、頭は鉛を溶かして流し込んだやうに重く、體は疲れ果てて、打ちのめされたやうであつた。

聖レデゴンド寺院の鐘が、ものうげに響いてゐた。この響きの合ひ間あひまに、表の戸を叩く音がした。大方だいぶ前から、根氣よく叩いてゐるものらしい。カッサンドラは耳を澄ました。すると、その聲でアビアテグラソの馬商人——自分の求婚者だといふ事に氣がついた。

「開けておくれ！ 開けておくれ！ シドニヤさん！ カッサンドラさん！ 一體お前さん方は耳でも潰れたのか？ まるで野良犬みたいに、ぐしよ濡れになつて了つたよ。この酷い降りの中を、後へ引つ返す譯にも行くまいぢやないか？」

娘はやつとの事で立上つて、鎧戸を閉め切つた窓に近寄り、叔母のシドニヤが念入りに隙穴の填めにして置いた、麻切れを取りのけて見た。佗しい朝の光りが、青みがかつた條目をなしてさし込みながら、死んだやうに床の上で寝てゐる、老いたる魔女を照すのであつた。彼女の傍には、捏粉の桶がひつくりかへつて、轉がつてゐた。カッサンドラは戸の隙間を覗いて見た。

それは鬱陶しい日であつた。雨はバケツを引つくり返したやうに降つてゐる。家の戸口の前には、灰色をした羅の雨の幕を透かして、戀せる馬商人の姿が見えた。その傍には、馬車に駕けられた小さな驢馬が、耳を伏せ、首を垂れて、立つてゐた。車の上からは、四足を縛られた犢が、めい／＼と啼きながら、鼻の先を覗けてゐる。

馬商人はなか／＼諦めようとしないうで、戸を叩き續けてゐる。カッサンドラはどうなる事かと、待つてゐた。

たうとう二階の實驗室の窓の一つで、鎧戸がぱたりと開いて、老鍊金術師が顔を覗けた。まだ寝足りないと思えて、髪を蓬々と振り亂し、さも氣難かしさうな、毒々しい顔をしてゐた。それはよく彼がとき／＼空想から醒めて、鉛が金に變る筈がないといふ事を、冷靜に意識し始めた時の顔に、そのまゝであつた。

「戸を叩いてるのは誰だ？」窓から身を乗り出しながら、彼はかう聞いた。「一たい何用なのだ？ 本當に氣でもちがつたのか、この老耄れめ！ 一たい時刻と云ふものが分からないのか？ 家でみんな寝てるのが分からないのか。とつとと歸つて了へ！」

「ガレオットさん、冗談ぢやない、何だつてお前さん、そんなに怒りなさんだ？ わしは大切な用事があつて、お前さんの姪御のことであつた。これ、この通り、牝の犢をお土産に持つて來たのに……」

「うるさい！」ガレオットは猛然と叫んだ。「うるさい、こん畜生、その犢を連れて、悪魔の

尻尾の下へでも隠れて了へ！」

鎧戸はぱたりと閉まつた。毒氣を抜かれた馬商人は、ちよつと靜まり返つてゐたが、すぐにまた我に返つて、なほ一そう恐ろしい勢で、まるで戸を叩き毀さうとでもするやうに、雙の拳を固めて、どんどん叩き始めた。

驢馬は一さう低く首を垂れた。絶望したやうにびつたり伏せた、濡れ鼠の兩耳を傳つて、雨の雫が靜かに流れ落ちる。

「あゝ、何といふ退屈なことだらう！」カッサンドラはかう呟いて、目を閉ぢた。

彼女はあの祭日の楽しさや、『夜の山羊』がデオニソスに變つた事や、偉大なる神々の復活などを、ふと思ひ出した。

「あれは夢だつたのか、それとも本當だつたのかしら？」と彼女は考へた。「きつと夢だつたのだらう。そして、いま見聞きしてる事が本當なのだ。日曜の後には月曜が來るんだわ……」

「開けておくれ？ 開けてくれないか！」もうしは噎れた自暴自棄な聲で、馬商人は喚き續けた。

●雨樋から落ちる重々しい雫が、單調な音を立てながら、汚水溜めへ流れ込んでゐる。犢は悲しげにめい／＼鳴き續ける。寺院の鐘はものうげに響いた。

第五編 汝のみ心の如くならせ給へ

ミラノの市民で靴屋のコルポロは、ゆうべ一杯機嫌で家へ歸つたところ、現在の女房のために（彼自身の言葉を借りると）、懶けものの驢馬がミラノから羅馬へ行き着くのに必要なより、もつと餘計に打擲の憂き目を見るのである。朝になつて、女房が隣りの古着屋の女房の所へ、豚の血の煮凝を喰へに出かけた時、コルポロは財布の中へ手を突つ込んで、女房に隠した幾らかの金を探つて見た後、店を下職に頼んで、宿醉をなほしに出かけた。

磨り切れた窄袴の衣囊へ、兩手を突つ込みながら、彼は大儀さうな足取りで、うねくねした暗い横町を歩き出した。その暗さは、騎馬の人が徒歩の人と行き合つたら、必ず爪先か拍車を打つ付けずに濟むまい、と思はれるほどであつた。橄欖油の焼ける匂ひ、腐つた卵や酸っぱい酒や、穴藏の微くさい臭ひなどが鼻を衝いた。

高い家と家の間に、縞のやうに見える暗い蒼い空や、女房たちが往來ごしに繩を張つて、色さま／＼なぼろ切れを掛け擲げた上へ、朝の太陽の照してゐる有様を見廻しながら、コルポロは小唄を口笛で鳴らし、鳴らし、古い諺を思ひ出して、自ら慰めてゐた。尤も彼自身は、一度もその諺を實行した事がないのであつた。

『女は善くても悪くても、鞭がなくては濟まされぬ。』

近道をしようと思つて、彼は寺院の中を通り抜けた。

こゝはまるで市場と同じ混雑であつた。やかましく禁ぜられてゐるにも拘らず、一方の戸口からいま一方の戸口へ、大勢の人がぞろ／＼通り抜けてゐた。中には、騾馬や馬を連れてゐる者もあつた。

僧侶たちは鼻にかゝつた聲で、祈禱式を勤めてゐた。懺悔室からはひそ／＼と囁く聲が聞え、祭壇には燈明が燃えてゐた。そのすぐ傍では、町の餓鬼どもが蛙飛びをして遊んでゐるし、犬はうろ／＼その邊を嗅ぎ廻り、ぼろ／＼の乞食の群は、往來の人に打つ突かるのであつた。

コルポロはちよつと一分間だけ、閑人の群に交つて立止まりながら、狡猾な同時に人の好い満足感を抱きつつ、二人の僧の口喧嘩に耳を傾けた。

饅頭のやうにてら／＼と圓い、陽氣さうな顔をした、背が低くて毛の赤い、跣足のフランシス派の僧チッポロは、相手のドミニコ派の僧チモテオに向つて、聖フランシスは四十の點に於いて、基督と相似てゐるために、悪魔リユシフェルの没落後、天上界で空いたまゝになつてゐた席に着かれた。そして、聖マリヤでさへも彼の聖痕を、イエスの十字架の傷痕と區別ができないくらいだと、論證した。

背の高い、氣難かしさうな、蒼い顔をしたチモテオは、聖カテリナの額に残つた荊の冠の痕を、セラフイム聖者の傷痕に比べて、かういふ物はフランシスにもなかつたと、反駁するのであつた。

コルボロは、寺院の陰からニレンゴ廣場へ出た時、まぶしい太陽の光線に、目を細めなければならなかつた。それはミラノ中で一ばん賑かな町で、ごちや／＼した行商人や、魚屋や、古着屋や、青物賣りの女などが、一面に店を擡げ立てて、數知れぬ箱や、日蔽ひや、荷擔ぎの盆などで、やつと細い通り路が残つてゐるだけであつた。もういつとも知れぬ古い昔から、彼らはこの寺院前の廣場へ巢を食つて、如何なる法律や罰則をもつてしても、彼らをこゝから追出す事が出来なかつた。

『ブルテリナの蒿草、檸檬、橙、朝鮮薊、獨活、上等の獨活でございます！』と青物賣りの女たちは客を呼び立てる。古着屋は頻りに値段の押し問答をしながら、巢についた牝鶏のやうに騒ぎ立てるのであつた。

山のやうに積上げた黄や青の葡萄、蜜柑、茄子、甜菜、花玉菜、フェンノカ、葱——などの下に隠れて了つた強情な小驢馬が、腸を掻き撈るやうな聲で、『イオ、イオ、イオ！』と啼いてゐると、うしろから馬追ひが太い棒で、毛の剥げた横腹を、ひう／＼音を立てながら、撲りつける。そして『アライ！アライ！』と引つ千切つたやうな聲を喉から出して、叱咤してゐる。

手に手に杖を持つて、一人の手引きに連れられた盲人が、長い列を作りながら、隣つばい聲で Intemerata を歌つてゐる。

獺の帽子に齒の頸飾を載せた、大道野師の齒抜き屋が、地びたに坐つた男の後に立つて、その頭を兩膝で挟んで抑へながら、まるで手品師のやうに敏捷い手つきで、大きな釘抜きをもつて齒

を引つこ抜いた。

子供らは猶太人に豚の耳を見せて厭がらせたり、往來の人の足もとへ獨樂をぶつ突けたりした。その惡戯つ子の中でも、一ばん亂暴な顔の黒い、鼻つ低のファルファニキオが、鼠捕りを持出して、二十日鼠を放しながら、『そらくだ、そらくだ！』と突き刺すやうな喚聲を上げては、箒を手に持つて追つ掛けた。鼠は追跡を免れようと、のん氣さうに靴下を編んでゐたバルバチヤといふ、でぶ／＼肥つた、乳の大きな青物賣りの女の、思ひ切つて廣い袴の中へ飛び込んだ。彼女はいきなり跳り上つて、まるで焼けどでもしたやうに、金切り聲を立てながら、裾を高く持上げて、鼠を振り落さうとした。一同はどつと笑つた。

「待つてろ、今その邊の石ころを拾つて、手めえの猿あたまを打ち割つてくれるから、こん畜生！」と彼女は氣ちがひのやうになつて怒鳴つた。

ファルファニキオは、遠くの方から舌を出しながら、有頂天になつて雀躍した。

大きな豚の死骸を頭に載せた行商人が、この騒ぎを聞いて振返つた。醫者のガバデオ氏の馬が驚いて飛び上がりさま駈け出す拍子に、古金物を商ふ小商人の店に觸つて、小山のやうに積上げた臺所道具を引つくり返した。すると網杓子、焼鍋、肉汁鍋、大根おろし、釜などが、轟然たる物音を立てて、あたりへ散亂した。急におち氣づいたガバデオ氏は、手綱を弛めながら叫んだ。

『止まれ、止まれ、この畜生め！』

犬が方々で吠え出し、ものずきな人たちの顔が、そここゝの窓から覗いた。

哄笑、罵詈、悲鳴、口笛、叫び聲、驢馬の咆哮などが、群衆の頭上に立ち迷うてゐた。かうした光景を眺めながら、靴屋はつゝましましやかに微笑を浮べて、考へた。

『あゝ、女房といふものがなかつたら、この世の中は結構なもんだがなあ。女房なんてやつは、丁度さびが鐵を食ふやうに、自分の亭主を蝕ひへらすのだ！』

彼は、小手を翳して日をよけながら、足場で取圍まれた、まだ工事の濟まない、巨大な建築を見上げた。それは聖母マリヤの誕生を祝ふために、人民に依つて起工された伽藍である。

人々は貧富貴賤の差別なしに、伽藍建立の寄進についた。キプロス島の女王は、金で編んだ高價な羅を送つて來るし、貧しい古着屋の老婆カテリナは、處女マリヤに喜捨するのだと、祭壇造營の費用の一部として、間近に迫つた冬の寒さも考へないで、値段にすれば僅か二十ソルドばかりの、たつた一枚しかない古い毛皮外套を寄附したのである。

子供の頃から、普請を観察する事の好きだつたコルボロは、今朝も新しい塔が一つ増えたのに氣が付いて、それが嬉しくて堪らなかつた。

石工どもは鎚をかち／＼鳴らしてゐた。オスベダレ・マジオレに近い、聖ステファノのラゲトといふ、解の繋ぎ場所になつてゐる荷揚げの波止場から、ラコマジオル石坑で切出した白大理石の大塊が、きら／＼と日光に輝きながら運ばれるのであつた。滑車がきりきりと鳴つて、鎖が齒がみでもするやうな音を立て、大理石を切る鋸は齒が浮くやうに軋んだ。人夫どもは蟻のやうに足場を傳つて、上つたりおりたりしてゐる。

かうして偉大な建物は、次第に大きくなつて行き、清淨無垢の白大理石で作つた鐘乳石のやうな尖塔や、鐘樓や、塔などが、碧瑠璃の空を背景にして、日に日に高くなつて行つた——聖母マリヤの誕生に對する、人民の永遠なる讚美のやうに。

二

コルボロは急な階段を傳つて、涼しい穴藏の中へ下りて行つた。それは獨逸人チバルドの酒場で、圓天井の下には、酒樽が一杯ならべてあつた。

彼は客人たちと丁寧に挨拶した後、知合ひの鉢力屋スカラブロの傍へ腰を下ろし、酒を一杯と、ミラン名物の蔴羅入りの菓子オフレットを注文した。彼は悠々と酒を一口すゝり、菓子を喰べて、さて徐ろに云ひ出した。

「スカラブロ、お前かしこい人間になりたかつたら、決して女房を持ちなさんな！」

「なぜ？」

「だつてなあ、お前、」と靴屋は考へ深さうに云つた。「女房を持つのは、譬へて見れば、鰻を擱まうと思つて、蛇の入つてる袋へ手を突つ込むやうなものだ。女房を持つよりか、足痛風(飲酒より病む)でも持つた方がましだよ、スカラブロ！」

隣りの卓では、金糸繡ひのマスクレロといふ、お喋りの道化者が坐つてゐて、未知の國ベルリントンツォーナの奇蹟じみた物語を、すき腹を抱へてゐる立ん坊どもに、話して聞かせてゐた。そこ

は『食ひたい放題』と呼ばれる樂園のやうな所で、葡萄の蔓には腸詰めが縛りつけられ、鶯鳥は一錢で買へて、しかも雛つ子がおまけに付く。そこにはまた乾酪で出来た山があつて、その山に住んでゐる人は、饅頭と團子を作つては、それを鶏の味汁で煮て、下へ投げるのが仕事になつてゐる。その饅頭や團子は、誰でも取り得るのである。近くにはエルナチオの川が流れてゐるが、これはこの上なく上等の酒で、水などは一滴も入つてゐない。

穴藏の中へ、瘰癧もちの小柄な男が駈け込んだ。目は仔犬のやうにどんよりして、はつきり物が見えないらしい。これは硝子吹きの高ルゴリオといふ恐ろしい金棒引きで、珍しい世間話の好きな男であつた。

「皆の衆、」埃に汚れた穴だらけの帽子を擡げて、額の汗を拭きながら、彼はさも得意さうに叫んだ。「皆の衆、わしはたつたいま佛蘭西兵の所からやつて来たのだ！」

「何をお前は云ふのだ、高ルゴリオ！ もうやつらこゝへ来てゐるのか？」

「来てなくつてさ、もうバギヤにゐらあな——ふうツ、まあちよつと息を繼がしてくれ。あゝ、苦しい。一生懸命に走つて来たのでなあ……もし誰かほかの者がわしより先に来たら、どうしようかと思つてさ……」

「さあ酒だ、一杯のんで話して聞かせろ。一たい佛蘭西人てどんな人間だい？」

「けんのんな人間だよ、兄弟、うっかりした眞似は出来ないぜ。野蠻な、亂暴な、種のちがふ、神様にそむいた、獣みたいな人間で——一口に云へば、つまり野蠻人なのさ！ 長さ八エルもある

る火繩銃や、銅の戟や、石の丸を填めた鐵の射石砲などを、ぽん／＼鳴らしてさ、馬はといへば、まるで海の怪物みたいなものだ——耳がぴんと立つて、尻尾は短くちよん切られて、恐ろしく氣の荒いやつなのさ。」

「大勢ゐるかい？」マゾーといふのがかう聞いた。

「もう數へ切れないくらゐだ！ まるで蝗か何ぞのやうに、廣い野原を一面に塞いで了つて、向うの涯が見えないほどだよ。神様が我々の罪を懲らすために、恐ろしい災難をおくだしなすつた。北の國の惡魔をお遣はしなすつたのだ！」

「どうしてお前は佛蘭西人をさうわるく云ふのだ、高ルゴリオ！」とマスカレロが注意した。

「佛蘭西は我々の親友ぢやないか、同盟國ぢやないか？」

「同盟國、そんな事に瞞されぢやいけない！ あんな親友は敵よりもつと悪い——庇を貸して母家を取られるだ。」

「あゝ、分かつた、分かつた、無駄口はいゝ加減にして、よく分かるやうに物を云へ、一體どういふ譯で、佛蘭西人が我々の敵なんだ？」とマゾーは追窮した。

「ほかでもない、我々の畑を踏み荒らしたり、林を伐つたり、牛馬を盗んだり、百姓の身の皮を剥いだり、女を強姦したりするから、それで敵なのだ。佛蘭西王といふのは見つともない、弱せつひよろけた男だが、女に掛けぢや中々の豪傑なんだ。何でも、眞裸の伊太利美人の肖像畫を集めた本を持つてゐて、もし神様がお助け下さるならば、ミラノからナポリまでの間に、一人も

無瑕の娘を残すまい、とか云つてるさうだ。」

「悪黨めらー！」とスカラプロは叫びながら、拳を固めて、力任せに卓を撲りつけたので、壘や杯がびり／＼と鳴つた。

「モローなんか、佛蘭西人の吹く笛に合わせて、後足で立つて踊つてるのだ。」とゴルゴリオが話を續けた。「やつらは我々を人間とも思つてやしない。やつらの云ふには、『手前たちはみんな盗人の人殺しだ。自分たちの本當の王様に毒を盛つぢやないか。罪もない子供を殺して了つたぢやないか。その罰に、神様が手前らの國を、我々に授けて下さるのだ。』なあ、皆の衆、こつちぢや心からやつらをもてなしてやるのに、やつらは我々のもてなしを、馬にやつて毒味させやがるぢやないか。この喰べ物の中に、王様を殺した毒が入つてるかも知れないつてね。」

「出たら目を云ふない、ゴルゴリオ！」

「これが出たら目なら、わしの目は潰れて、舌の根は乾いて了ふだらう！ それにまあ、皆の衆、聞いてくれ。それどころか、やつらはまだ／＼恐ろしい廣言を吐いてるんだよ。『我々は、始め伊太利ぢうの人民といふ人民、國といふ國、海といふ海を攻め伏せて、大土耳其王を生け捕りにし、君府を占領して、エルサレムの橄欖山に十字の印を建てた上、その後でまた伊太利へ歸つて来る。そのとき手前らに神の審判を行ふのだが、もしそれに従はないならば、手前らの名前を地球の上から、拭き取つて了つてやる』とかうなんだよ。」

「困つた事だ、なあ、皆の衆。」と金絲繡ひのマスカロが云つた。「あゝ、困つたもんだ！

こんな事はこれまでに、まだ一度もなかつたのになあ……」

一同はしんと静まり返つた。

先ほど寺院の中で、チッポロと争論をしてゐたドミニコ派の僧チモテオは、両手を空へ上げながら、壯重な聲で叫んだ。

「神に送られた偉大なる豫言者、デロラモ・ザゾナローラの言葉は當つた——やがて劍を鞘より抜かずして、伊太利を征服すべき人あらはれんだ。おゝ、フロレンスよ、おゝ、羅馬よ、おゝ、ミラノよ、歌舞と祝宴の時は過ぎ去つた。悔い改めよ！ 悔い改めよ！ ジアン・ガレアツツォ公の血——カインに殺されたるアエルの血は、天なる神に向つて復讐を叫んでゐるのだ！」

三

「佛蘭西人だ！ 佛蘭西人だ！ あれを見ろ！」穴藏へ入つて来る二人の兵士を指さしながら、ゴルゴリオはかう云つた。

一人は赤い鼻鬚をちよぼつと生やして、美しい高慢ちきな顔をした、ガスコニ生れの若いすらしした男で、名をボニヴールといふ佛蘭西騎兵隊の下士であつた。いま一人の仲間、ピカルヂイ生れのグロ・ギリオーシュといふ砲手で、目は蝦のやうに飛び出し、顔には一面に血が漲つて、頸は牡牛のやうに太く、よく肥えて、がつしりした老人であつた。耳には銅の環がぶら下がつてゐる。二人とも一杯機嫌であつた。

「いつになつたらこのいまくしい町で、せめて一杯でも甘い酒にあり付けるだらう？」グロ・ギリオーシュの肩を叩きながら、下士が口を切つた。「ロムバルヂヤの酸っぱい酒で、まるで酔でも飲んだやうに、舌がぴり／＼するわ！」

ボニヴールは、さも氣難しさうな退屈らしい顔つきをして、とある卓の前へどつかと坐り込むと、高慢ちきな様子で、ほかの客をじろ／＼見廻しながら、錫の杯で卓をとん／＼叩いて、破格の伊太利語で怒鳴つた。

「白を持つて来い、よく乾れた一ばん古いのをな！ それから、さかなはチェルゼラタの鹽漬けだ。」

「全くだよ、兄弟。」とグロ・ギリオーシュは嘆息した。「國のブルゴン酒か、それとも可愛いリゾンの髪みたいに金色をした、素張らしいボム酒の事を思ひ出すと、懐かしさに心の臓が疼くやうだ！ 全くその國の人間と酒とは、よく似たもんだよ。なあ、兄弟、懐かしい佛蘭西のため、一杯ほさうぢやないか！」

Du grand Dieu soit maudit à entrance,

Qui mal vouloit au royaume de France !

(佛蘭西王國に怒を願ふ者どもに大神の烈しき呪ひあるべし)

「あいつら何を云つてるんだ？」スカラブロは、ゴルゴリオの耳に口を當てて、囁いた。「氣まぐれを云つてるのよ——伊太利の酒を貶して、自分の國の酒を自慢してるんだ。」

「ちよつ、佛蘭西の鶏野郎め、何を威張つてるんだ！」と鉢力屋は眉を顰めながら、呟いた。

「おれは腕がもぞ／＼する、あいつらに一つ作法を教へてやりたくつて、もぞ／＼するよ！」

細い足に大きな腹を載せて、廣い革帯に大束の鍵を結へ付けたこの家の亭主——獨逸生れのチバルドは、樽の中から半ブレンタ(一ブレンタは百七十リットル)の酒を出して、見馴れぬ異邦の客をけ／＼さうに見廻しながら、冷氣で汗を掻いた素焼の瓶に入れて、佛蘭西兵に差出した。

ボニヴールは杯コップに一杯、ぐつと一息に飲み干した。酒は無類とび切りのやうに思はれたけれど、彼はべつと唾を吐いて、顔に嫌惡の表情を浮べた。

丁度その傍を、主人の娘のロッタが通り過ぎた。それは白つぼい髪をした、愛くるしい少女で、チバルドと少しも違はない善良さうな、空色の目を持つてゐた。

ガスコニイ人は狡さうな仲間と目交ぜをして、大氣取りで赤い髭を捻つた。そして、またもう一杯のみ乾した後、シャルル八世の軍歌を大聲で唱ひ出した。

Charles fera si grandes batailles,

Qu'il conquerra les Italiens.

En Jerusalem entra

Et Mont Oliviet montora.

(シャルルは偉大なる戦ひをなし、伊太利の國土を討ち、從へ、エルサレムの都に入りて、橄欖山に上るべし。)

グロ・ギリオーシュは、しや噎れた聲で合唱した。

ロツタが歸りしなに、つつましかに目を伏せながら、二人の傍を通りかゝつた時、下士は少女を自分の膝へ載せようとして、彼女の細腰に抱きついた。

彼女は下士を突き飛ばして、振りほどきさま、そこを逃げ出した。こちらはすぐに跳び起きて、少女を引つ捕へ、酒に濡れた唇で頬に接吻した。

娘はきやつと叫んで、素焼の瓶を床へ取落した。瓶は粉々に割れて了つた。彼女は突然うしろへ振返つて、力任せに佛蘭西人の頬つぺたを叩き付けたので、こちらはちよつと毒氣を抜かれて了つた。

客はみんな一時にから／＼と笑ひ出した。

「よう、よう、娘さん！」と金糸繡ひは叫んだ。「聖ゼルヴジウス様に懸けて誓ふが、おれは生れてからこのかた、こんな豪い頬打ちは見だ事がないよ！ いや、いゝ腹いせをしてくれた。」

「おい、打つちやつとけよ、かゝり合ひになるな！」グロ・ギリオーシュは、ボニヴァールを押し止めた。

けれど、ガスコニイ人は聽かうとしなかつた。酒の酔ひが一時に頭へ昇つたのである。彼は苦しうな作り笑ひをして、叫んだ。

「おい、別嬪さん、待ちな。今度はもう頬つぺたでなしに、いきなり唇だ！」

彼は少女を追つ掛けた。卓がひつくりかへつた。やがてすぐ追ひ付いて、接吻しようとした。けれど、鍼力屋のスカラブの頑丈な手が、うしろから彼の襟首を引つ掴んだ。

「やい、この犬め、恥ぢ知らずの佛蘭西の畜生め！」とスカラブはボニヴァールを小づき廻して、いよ／＼強く首を絞め付けながら、かう怒鳴つた。「待つてろ、今に貴様の横つ腹をぐたくたにしてやるから。ミラノの娘に失禮な眞似をすると、どんなものか覚えて置くがいゝ……」

「どける、悪黨！ 佛蘭西萬歳！」負けず劣らず腹を立てながら、グロ・ギリオーシュはかう喚いた。

彼は劍を振り翳して、あはや鍼力屋の背中へ突き立てようとしたが、その一刹那、マスカレロ、ゴルゴリオ、マゾー、その他の飲み仲間が駆け寄つて、彼の手を抑へた。

ひつくりかへつた卓、ベンチ、樽、毀れた壺のかけら、酒の流れ——かういふものの中で、掴み合ひの争闘が始まつた。

血や抜き身の劍や庖丁などを見て、仰天したチバルドは、穴藏から外へ飛び出して、廣場ぜんたいへ響き渡るやうな聲で喚いた。

「人殺し！ 佛蘭西人が強盗に入つた！」

市場の鐘が鳴り出した。すると、またプロレットでも別な鐘を突き始めた。用心ぶかい商人たちは店を閉め、古着屋や青物賣りの女どもは、商品を載せた盆を擔いで、逃げ出した。

「わたくしどもの守り神プロタジウス聖者さま、ゼルヴジウス聖人さま、どうぞお助けを！」とバルバチャが唱へた。

「一たい何事だ？ 火事でもあるのか？」

「やつつけろ、佛蘭西人をやつつけろ！……」
 悪戯小僧のファルファニキオは、有頂天になつて飛び上がり、口笛を吹きながら、金切り聲を上げて怒鳴つた。

「やつつけろ、佛蘭西人をやつつけろ！」

町の保民官が、火繩銃に戟を持つて現はれた。

彼らはすぐさま現状へ駆け付けて、殺人を未然に防ぎ、ボニワールとグロ・ギリオーシュを、群集の手から奪ひ取つた。そして、手當り次第に暴徒を引つ捕へた。その中に、靴屋のホルボロも交つてゐた。

騒ぎを聞いて駆け付けた女房は、両手を打ちながら、泣き出した。

「どうかお慈悲でございます、家の宿六を放して、わたしに渡して下さいませ！ さうしたら、わたしが自分流儀で、こいつをうんと行儀して、これから町の喧嘩事に、かゝり合はないやうにさせます！ 全くお役人様、こいつは仕様のない馬鹿もので、首絞め繩ほどの値うちもございませぬ！」

ホルボロは女房の雑言を聞かない振りをして、悲しさうに恥かしげに目を伏せて了つた。そして、彼女の目にかゝらないやうに、保民官の後に身を隠した。

四

まだ工事中の寺院の足場で、一人の若い石工が、大殉教者聖カテリナのさゝやかな彫像を持つて、大圓頂閣からほど遠からぬ、とある細長い鐘樓をさして、狭い繩梯子を攀ぢてゐた。この彫像を、尖塔の一番さきへ着けねばならぬのであつた。

まるで鐘乳石のやうにすく／＼と立つ尖塔、低く這ふやうな^{ア、チ}迫持、見た事もない花や若芽や葉で出来た石のレース細工、數知れぬほど澤山ある豫言者、殉教者、天使、さながら笑ふやうな醜い顔をした悪魔、奇怪な鳥、海女神、鷲、それから雨樋の端に飾つてある、翼のとげ／＼した、大きな口をわつと開いた龍——かういふものが彼の四邊に、踊るが如く聳えてゐた。これらはすべて目ばゆいばかりの大理石で作られ、煙のやうに青い陰影を帯びてゐて、丁度かゞやかしい霜に蔽はれた、巨大な冬の林のやうであつた。

あたりは静かであつた。たゞ燕がちつ／＼と鳴きながら、石工の頭上を掠めるばかりであつた。廣場の群衆の雑音は、まるで蟻塚のざはめきのやうに、彼の耳へ傳はつて來た。はてしのない緑いろのロムバルチャ平野のかなたには、寺院の頂きと同じやうに白く尖つて、雪を戴いたアルプスの連峰が輝いてゐた。とき／＼下の方から、風琴の響きが傳はつて來るやうな氣がした。それはちようど寺院の内部から——石の心臓の奥から發せられる、祈りの溜息か何ぞのやうであつた——その瞬間、この偉大な建物に生氣が通つて、呼吸し生長しつつ、天をさして伸びて行くやうに思はれた。それは、生れ出づる處女マリヤに捧ぐる、永久の讚美であつた。陽の衣を着た聖なる女性に對する、すべての民の悦ばしき頌歌であつた。

とつぜん廣場の騒音が高まつて、警鐘の響きが聞えた。

石工は立止まつて下を見おろした。と、頭がくるく廻り出して、目の中が暗くなつた。彼は足もとの大建築がぐらくと揺いで、いま攀ぢ登つてゐる細い尖塔が、葦のやうに曲つて行くやうな氣がした。

「どうしても落る！」彼はぞつととして考へた。「神物、どうかわたくしの靈をお受け下さいまし！」

一生懸命に最後の力をふるつて、繩梯子に掴まりながら、目を閉ぢてかう呟いた。

「Ave, dolce Maria, di grazia piena !」(慈愛ぶかきマリヤよ、み恵みを垂れ給へ！)

彼はだいぶ氣持が軽くなつた。

上の方からは、涼風がそよと吹いて來た。

彼は息を繼いで、氣力を振り起し、今度はもう地上の聲を聞かないやうにして、自分の道を歩み續けた。そして、偉大なる歡喜をもつて Ave, dolce Maria, di grazia piena を繰返しつつ、次第に高く、靜かな清い空をさして、登つて行くのであつた。

このとき廣々とした殆ど平坦な大理石の屋根つたひに、建造會議の委員たちが歩いて來た。それはチブリオ——寺院の圓頂閣の上に建てるべき一番おもな塔——に關する評議のために、王に招聘せられた伊太利ならびに外國の建築家であつた。

その中に、レオナルド・ダ・ビンチも交つてゐた。彼は自分の考案を提出したけれど、委員た

ちは寺院建築の傳統に背馳した、餘りに大膽放肆な異説として、それを斥けて了つた。

人々はたゞ論議するばかりで、一致點を見出すことが出来なかつた。ある者は、内部の柱が充分しつかりしてゐない、と論じた。『もしチブリオやその他の塔が落成したら、間もなくこの建築物は、崩れて了ふに相違ない。つまり、無智な連中が建築に着手したからだ。』と彼らは云つた。ところが、ほかの者に云はすと、寺院は永劫に保存せられるとの事であつた。

レオナルドはいつもの通り、議論の仲間に入らないで、少し離れた所に無言のまゝ、淋しく立つてゐた。

一人の勞働者が彼の傍へ寄つて、一通の手紙を差出した。

「旦那、下の廣場で、パギヤから馬で來た人が、旦那を待つてをられます。」

畫家は手紙の封を切つて、讀み下した。

『レオナルド、すぐ來てくれ。お前に會ひたい事がある。ジャン・ガレアツツォ公。十月十四日。』

彼は會議の委員たちに斷はつて、廣場へ下り、馬に跨がつて、カステロ・ヂ・パギヤの城をさして出發した。それは、ミラノから馬で二三時間の處であつた。

五

大きな庭の栗、楡、楓などが、黄金や紅くはなるの秋の錦を、太陽の光りに輝かし、枯れた木の葉は、

蝶のやうに舞ひ落ちてゐた。草ぼう／＼と繁つた噴きあげには、水が出てゐなかつた。荒れた花壇では、蝦夷菊が萎れかゝつてゐた。

城へ近づいて行く途中、レオナルドは一人の一寸法師を見つけた。これは昔からジャン・ガレアツォに付いてゐる道化で、ほかの侍僕がみんな、瀕死の王を見捨てたにも拘らず、たゞひとり主君に對する忠節を變へなかつた。

レオナルドに氣が付くと、彼はびよ／＼飛び上がるやうな足どり、畫家の方へ駆け寄つた。「殿様のご病氣はどんなだ？」と畫家は訊ねた。

「こちらは何とも答へないで、たゞ絶望したやうに手を振つた。

レオナルドは、正面の廣い並み木道を進まうとした。

「いえ、いえ、そちらからではありません！」と一寸法師が押し止めた。「そちらは見つかふ心配があります。殿様は、内密にせよとの仰せでございましたから……もしお妃のイサベラ様がお知りになりましたら、よもやお通しなさりはしますまい。ですから、少し遠廻りをして、わき路を通りませう……」

一ばん隅の塔へ入つて、二人は階段を昇つて行つた。そして、かつて以前は壯麗を誇つてゐたらしいけれど、今は住む人もない、陰氣なへや／＼の前を通り過ぎた。金箔を捺した高價な羊皮の壁紙は、もう引つ剝がされて了ひ、絹の帷を垂らした玉座には、蜘蛛が一ぱい巢を張つてゐた。硝子の破れた窓からは、秋の夕風が庭の黄葉を吹き込んでゐる。

「悪黨、泥棒！」荒廢の跡を畫家に指して見せながら、一寸法師はぶつ／＼口の中でぼやくのであつた。「まあ、どうぞごさいませう。こゝの様子をご覽になつたら、ご自分の目が本當に出來ないくらいでございますよ！ わたくしは世界の果てへでも、逃げて行きたいのでございますが、こんな年寄つた片輪者のほかに、殿様をお世話上げる人がりませんので……こちらです、こちらへおいで下さいまし。」

とある扉を細目に開けて、彼は藥の匂ひの滲み込んだ、息苦しい暗い部屋へ、レオナルドを案内した。

六

放血術は、醫學の原則に従つて、窓の鎧戸を閉め、蠟燭を點じて行なつた。理髮師の助手は銅の盥を捧げて、血の滴りを受けてゐた。當の理髮師は謙遜な老人であつたが、兩袖をたくし上げて、血管の切解をしてゐる。「醫學の師」であるドクトルは、考へ深さうな顔に眼鏡を掛け、濃い瑠璃色の天鵞絨に栗鼠の毛皮の裏を付けた、醫師用の肩當てを羽織つてゐた。外科用の器具に手を觸れるのは、醫家の見識を落す事とされてゐたので、彼は理髮師の手術には關係しないで、たゞちつと傍觀してゐた。

「夜の來る前に、もう一ど放血しなさい。」手に繻帶をし終つて、病人を枕の上へ臥せた時、彼は命令的にかう云つた。

「先生、」理髪師はおづ／＼と、慇懃な調子でかう云つた。「も少し待つた方が宜しくはありませんか？ どうも餘り血をなくしますと……」

醫師はさも輕蔑したやうな薄笑ひを浮かべながら、ぢつと彼の顔を見つめた。

「君、ちつとは恥ぢを知りなさい！ もういゝ加減、合點が行きさうなものぢやないか。人間の體內にある二十四斤の血の中で、二十斤まで出してつても、生命や健康に危険はありやしない。井戸の中から腐つた水を出せば出すほど、新しい水がどん／＼ふえるもんだよ。わしは少しも容赦なしに、乳呑み兒の血を出したけれど、しあはせと、いつでも結果が好かつた。」

この會話を注意ぶかく聽いてゐたレオナルドは、これに對して、反駁を試みようかと思つたが、醫者と議論するのは、鍊金術師と議論するのと同じく、無益な業だと考へ直した。

醫師と理髪師はさがつて行つた。一寸法師は枕の具合を直し、病人の足を毛布でくるんだ。

レオナルドは部屋の中を見廻した。寢床の上には、小さい綠色の鸚鵡を入れた籠が吊るしてあり、小さな圓卓の上には歌留多や、骸子がごろ／＼してゐるし、水を入れて金魚を飼つた硝子の器物も置いてあつた。王の足もとには、白い小犬が丸くなつて寝てゐた。これらは忠實な侍僕が、主君を慰めるために考へ付いた、最後の氣ばらしなのであつた。

「手紙を出したのか？」王は目を開けないでかう云つた。

「あゝ、殿様、」一寸法師は急に慌てて、「まだお寢みかと思ひまして、待つてゐた所でございます。レオナルド先生はこゝにいらつしやいますので……」

「こゝに？」

病人は悦ばしげに微笑を浮かべながら、身を起さうと骨折つた。

「レオナルド、やつとのことで！ わしは、お前が来てくれないかと思つて、心配してゐたよ……」

彼は畫家の手を取つた。まだ若くて美しいジャン・ガレアツツォの顔は——彼は二十四であつた——弱々しい紅の色を呈した。

一寸法師は戸口で張り番をするために、部屋の外へ出て行つた。

「レオナルド、」と病人は語をついだ。「お前はもろろん聞いたらうな？……」

「殿下、なんの事でございます？」

「知らないか？ それなら、何もわざ／＼云ひ出す必要はない。いや、しかし同じ事だ、話さう。さうして、一緒に笑はうぢやないか。世間の噂では……」

彼はちよつと言葉を止めて、ひたと相手の目を見つめたのち、靜かな薄笑ひと共に、かう云ひ足した。

「世間の噂では、お前がわしの下手人ださうな。」

レオナルドは、病人が讒語を云つてゐるのだと思つた。

「さうだとも、さうだとも、本當に馬鹿げきつた事ぢやないか、お前がわしの下手人だなんて！……」と王は繰返した。「三週間以前、叔父のモローとベアトリーチェが、わしに一籠の桃

を贈つて来たのだ。妃のイサベラは、その果物を喰べて以来、わしの容體が一そう悪くなつた、わしは段々と毒が廻つて死んで行くのだ、しかもお前の家の庭にそんな木がある……と、こんな風に信じ切つてゐるのだよ。」

「全く」とレオナルドが云つた。「わたくしの家にさういふ木がありません。」

「お前は何を云ふのだ？ 一體……」

「いえ、もしその果物がわたしの家から出たものとすれば、神様がわたくしを救つて下さつたのでございます。さういふ噂がどこから出たか、今こそ分かりました。實は毒の作用を研究するために、わたくしは桃の木に毒を注射したのでございます。そして、弟子のゾロアストロ・ダペレトラに、この桃の實には毒があると、話して聞かせました。けれど、この實驗は不成功に終つて、桃は全然無害なのでございます。きつと弟子が早まつて、誰かにこの話をしたのでございませう……」

「わしもさうだらうと思つてゐた。」と王は悦ばしげに叫んだ。「わしの死は誰のせるでもないのだ！ それなのに、みんな互に疑つたり、憎んだり、恐れたりし合つてゐるのだ……あゝ、わしとお前と話し合つてゐるやうな調子で、あれらに何もかも話す事が出来たらなあ！ 叔父は自分で自分を、わしの下手人だと思つてゐるが、わしにはよく分かつてゐる。あの人は善い人間なのだ。たゞ弱くて臆病なだけだ。それに、あの人がわしを殺す譯など、ないではないか？ わしは自分で叔父に政權を譲るつもりだ。わしはなんにも要らない……わしはかういふ周圍を去つ

て、自分の好きな友達と一緒に、自由と孤獨の中に住みたいと思ふ。全く坊主になるか、それともお前の弟子にでもなりたいたいよ、レオナルド！ しかし、わしが本當に政權に未練のない事を、誰も信じようとしぬのだ……一體なんのために、あゝ本當に何のために、皆は今度あゝいふ事をしたのだらう？ お前の罪のない木の罪のない果物で、彼らはわしでなしに自分自身を毒害したのだ。何といふ惻れな盲人たちだらう！……以前はわしも死なねばならぬ自分を、不幸の身上と思つてゐたが、今こそすつかり悟つたよ、レオナルド！ わしはもう何も望まないし、何も恐れはしない。わしは穩かないゝ氣持だ。ちやうど堪らなく暑い日に、埃だらけの着物を脱ぎ捨てて、清らかな冷たい水の中へ入るやうな、悦ばしさを感ずる。いや、わしは巧く云ひ現はす事が出来ない。けれどお前は、わしの云はうと思ふ事を、理解してくれるだらうな！ お前自身からして、さういふ人間なんだから……」

レオナルドは無言のまま靜かな微笑を浮べて、彼の手をちつと握りしめた。

「さうだらうと思つてゐた。」と、王はなほも悦ばしげに語り續けた。「お前なら、わしの云ふ事を理解してくれるだらう、と思つてゐたよ。憶えてゐるかい、いつかお前はわしに向いて、機械學の永遠の法則——つまり自然の必然性の法則に關する冥想は、人間に偉大な忍従と平安を教へてくれる、とこんな事を云つたことがあつたなあ。その時わしはよく分からなかつたが、こんど病氣して、孤獨の中に夢うつゝとなく、始終お前の事ばかり思ひ出してゐたよ。お前の顔、お前の聲、お前の言葉を、ひとつ／＼思ひ出してゐたよ、レオナルド！ 實はね、わしは時々こ

んな氣持がするよ。お前とわしとは別々な道を通つて、同じ所へ行き着いたのだ——お前は生の中で、わしの死の中で……」

このとき不意に戸が開いた。一寸法師が、憎えたやうな顔をして駆け込みながら、かう云つた。「ドルダ様でございます！」

部屋の中へ入つて來たのは、ジャン・ガレアツォの年寄つた乳母であつた。手にどんよりと黄みがうつた液の入つた、小さな壺を持つてゐた——それは蠟の汁であつた。

夏の半ば、太陽が大犬座と合した時、人々は蠟を掴まへて、十字草と拳蓼ク羅斯ルーナルの入つた百年以上の橄欖油へ、生きたまゝ浸し、五十日間天日に曝して、汗を絞り出し、それを毎晩病人の腋の下、こめかみ、腹、心臓の周りへ塗るのであつた。巫女などに云はせると、單に毒ばかりでなくて、魔法や呪咀などに對しても、この上ない良藥なのであつた。

老婆は、レオナルドが寢臺の端に腰掛けてゐるのを見ると、思はず足を停めて、さつと顔色を變へた。そして、兩の手は危く壺を取落しさうなほど、ぶる／＼と慄へ始めた。

「わたしたちは神様が守つてゐて下さる！ 尊い聖母マリヤ様！……」

十字を切つて、祈禱を唱へながら、彼女はじり／＼と後ずさりした。そして部屋の外へ出るや否や、老いの足の許す限り、一目散に主人イサベラのもとへ、恐ろしい報知を齎しに駆け出した。ドルダは、悪人のモローとその手先のレオナルドが、ガレアツォ公を殺したに違ひない、よし毒を使はないにしても、目の力とか、呪文とか、またはその他なにか、悪魔めく魅力を用ひた

に相違ないと、固く信じて疑はなかつた。

妃は禮拜堂の聖像の前に跪いて、一心に祈念を凝らしてゐた。

王の所にレオナルドがあるといふ知らせを、ドルダから聞いた時、彼女は跳り上つて叫んだ。

「そのやうな事があつてよいものか！ 誰が通したのだえ？」

「誰が通したと仰しやいますか？」老婆は首を捻りながら呟いた。「いえ、殿下様、わたくしもあの悪魔がどこから入つたか、とんと合點が参りませんので！ まるで地の中から生えたのか、煙突から飛び込んだか、本當に恐ろしい事でございます。いづれ眞當な事をして來たのではありますまい。わたくしがもう前から、殿下様に申上げてをりました通り……」

禮拜堂へ一人の小姓が入つて來て、恭しく片膝つきながら、

「妃殿下さま、佛蘭西國王陛下が、兩殿下さまにご面會を求めてゐられます！」

七

佛蘭西國王シャルル八世は、ロドギコ・モロー公が彼のためにと贅澤に飾り立てた、パギヤ城の階下の一室に泊つてゐた。

國王は食後の休憩をしながら、彼の命に依つて、新しく羅旬語から佛蘭西語に翻譯されたばかりの、『羅馬市の奇蹟』といふかなり馬鹿げた本の朗讀を聞いてゐた。

シャルルは幼年時代、父親に脅しつけられて、アムブアーズの淋しい城に、病的な子供として、

たゞひとり悲しい年月を送りながら、様々な騎士物語に教育されて大きくなつた。かうした物語は、それだけでなくさへ薄弱な彼の頭脳を、すつかり滅茶々に掻き廻したのである。二十歳の年に佛蘭西の王位に即位した彼は、圓卓の騎士(アーサー)や、ランチェロットや、トリスタンなどの本に書いてあるやうな、功名手柄を立てるべき勇士のやうに、自分一人で思ひ込んだ。何の経験もない、はにかみやで、お人好しで、少々智慧の足りないこの少年が、本で讀んだ事を實行しようと、考へ出したのである。年代記作者の言葉を借りると、『軍神マルスの子であり、ジュリウス・シーザーの後裔』である彼は、大軍を率ゐて、ロムバルヂヤの野へ下つて行つた。それは、ナポリ、シシリア、君^{コンスタンチノブル}府、エルサレムを征服し、大土耳其王を玉座から引摺り落し、マホメットの異教を根絶して、基督の柩を不信の徒の手中から救ひ出さうと、かういふ目的なのであつた。單純な信じ易い心をもつて、『羅馬の奇蹟』を聽きながら、王はこの偉大な都市の征服に依つて獲らるべき光榮を、今から味はひ樂しむのであつた。

彼の思想は混亂して了つた。みぞおちの邊がしく／＼痛んで、ゆうべミラノの貴婦人たちと晚餐を共にしながら、思ひ切り愉快に過ぎた一夜のために、頭はどんよりと重く感じられた。貴婦人たちの一人ルクレチヤ・クリヰルリの顔が、夜ぢう彼の夢に現はれたのである。

シャルル八世は背が低くて、醜い顔つきをしてゐた。足は曲つて編み針のやうに細く、狭い肩は一方が高く一方が低く、胸は落込み、鼻は不釣合ひに大きくて鈎状^{かぎなまり}をしてゐるし、薄赤い髪はまばらで、鼻の下や腮には、奇妙な黄みがかつた産毛^{うぶげ}が生えてゐた。両手や顔には、神經的な

痙攣が見られた。小さな子供のやうに、始終あいてゐる薄い脣、ぴんと吊り上つた眉、飛び出したやうな、白目がちの大きな近視眼、かういふものが彼の顔にもうい、放心したやうな、それと同時に、低能な人間にあり勝ちな緊張した表情を與へてゐた。彼の話し振りは不明瞭で、斷片的であつた。人の噂に依ると、王は六本の指を持つて生れたので、それを隠すために、黒い天鵝絨で作つた、馬の蹄のやうに先が圓くて廣い、柔かな上靴を穿く醜い風を、宮中で流行させたとの事である。

「チボー、おい、チボー！」いつもの癖で、放心したやうな顔つきで朗讀を遮りながら、彼は近侍にかう云つた。彼は物を云ふ時に、必要な言葉を見つけた事が出来ないで、恐ろしく吃るのであつた。「わしは、お前、その……何だか飲みたいやうな氣がする。うん？ 胸焼けとでもいふのだらうか？……一つ酒を持つて来てくれないか、チボー！」

そこへ元老のブリソネが入つて来て、ガレアツツォ公が待つてゐる由を告げた。

「うん？ うん？ 何だつて？ ガレアツツォ公が？……よし、今すぐ。ちよつと一杯飲んでから……」シャルルは近侍の差出す杯を取つた。

ブリソネは王を押し止めて、チボーに訊ねた。

「國のか？」

「いゝえ、陛下、この町の穴藏から取つて来たものでございます。國のは持合せがなくなりましてので。」

元老は酒を打ちまけて了つた。

「陛下お赦し下さいまし！ 土地の酒は、陛下のお體に障るかも知れませんが。チボー、酒番にさう云ひつけてくれ、陣所へ一走り走つて行つて、輜重隊の害から一樽もつて来るやうにな。」

「なぜ？ うん！ 何だ、どうしたと云ふのだ？……」と國王はけんさうにかう訊ねた。

元老は彼の耳に口を寄せて、實は毒害を恐れるのだと囁いた。自分の國の正當な皇帝を殺すやうな人間は、どんな裏切りを敢てするかも知れない。無論、確かな證據といつてはないけれど、用心をするに越した事はない、と説明した。

「何だばか／＼しい！ 何のためにそんな事をするのだ？ わしは飲みたいのぢやないか。」とシャルルはいま／＼さうに、一方の肩を疎めながらかう云つたが、それでもやはり折れて了つた。

先觸れが先に立つて駈け出した。

四人の小姓は王の上に、銀で佛蘭西百合を繡ひ取つた水色絹の天蓋を捧げ、執事は黃鼯の毛皮で端を取り、金糸で蜜蜂と騎士の標語たる「Le roi des abeilles n' a pas d'aiguillon」(蜂の王は刺)といふ言葉を繡ひとつた、眞紅の天鵝絨のマントを、彼の肩へ羽織らせた——かうした美々しい行列は、パギヤ城の陰鬱な荒れたへや／＼を通つて、瀕死の王の病室へ進んで行つた。禮拜堂の傍へ差しかゝつた時、シャルルは妃イサベラの姿を見かけた。彼は恭々しく帽子を取

りながら、古い佛蘭西の習慣に従つて、その傍に近寄り、「愛する妹よ」と呼んで、その口に接吻しようとした。

けれど、妃は自分から彼の傍へ寄つて、その足もとに身を投げた。

「陛下、」と彼女は豫め用意した言葉を切出した。「どうかわたくし共をお憐み下さいまし！ さすれば、必ず神様のお酬いがございませう。俠氣ある騎士のやうな陛下、どうか罪のないわたくし共を、お助け下さいまし！ モローはわたくし共の物をすつかり——王位まで奪ひ取つて了つた上、ミラノの正當の王たるわたくしの夫、ジャン・ガレアツォに毒を盛つたのでございませう。わたくし共はわが家にゐながら、人殺しの悪人に取巻かれてゐるのでございます……」

シャルルは、なんの事かよく分からなかつた。彼女の云ふことを、ろく／＼聞いてゐなかつたのである。

「え？ え？ 何ですか？」ひく／＼と片方の肩を引つ吊らせながら、まるで寢とぼけた者のやうに、吃り吃りかう呟いた。「ま、ま、そんな事はやめて下さい……お願いです……さ、あなた、やめて下さい……お立ちなさい、お立ちなさい！」

けれども、彼女は立たうとしないで、シャルルの手を執つて接吻しながら、その兩膝を抱かうとさへした。そして、到頭さめ／＼と泣き出しながら、偽りならぬ絶望の聲を上げて叫んだ。

「陛下、もし陛下までわたくし共をお見捨てになりましたら、わたくしはもう自害するよりほか致し方がございません！……」

王はもうすつかり當惑して了つた。そして、自分でも泣き出しさうになつて、顔を病的に顰めるのであつた。

「いや、どうもこれは！……あゝ、どうしたものだ……わしは駄目だ……ブリソネ……お願いだ、わしには分からん……妃にさう云つてくれ……」

彼はもう逃げ出したいやうであつた。彼女はシャルルの心中に、まるで同情の念を引き起さなかつた。なぜと云つて、かうした極度の屈辱と絶望の中にあつても、彼女は餘りに氣高く美しく、まるで神々しい悲劇の女主人公のやうに見えたからである。

「お妃様、どうぞご安心あそばさいます！ 陛下はあなたのために、またあなたのお配偶者（つれあひ）ン・ガレアツツオ様のために、出来るだけの事をお盡しなさるでございませう！」元老は王の名を佛蘭西風に發音しながら、さも保護者らしい、冷たい慇懃な調子でかう云つた。

妃はブリソネの方へ振返つた。それから、ちつと注意深く王の顔を見つめてゐるが、とつぜん自分の話し相手がどんな人間かといふ事を、始めて悟つたやうに口を噤んで了つた。

彼女の前には醜い滑稽な憫れな男が、まるで小さな子供のやうに厚い唇をだらりと開け、緊張した、無意味な、途方に暮れたやうな微笑を浮べ、大きな白目の勝つた目を剥き出しながら、ぼんやり立つてゐるではないか。

『わたしはこんな瘦せ餓鬼のやうな、低能兒の足もとに膝を突いてゐるのだーアラゴン王フェルデナンドの孫ともあらうわたしが！』

かう思ひながら、彼女は立上つた。蒼褪めた頬がさつと赤くなつた。王は、この場合なにか言葉を發して、この沈黙を破らなければならぬ、と感じたので、一生懸命な努力をして、例の一方の肩を引つ吊らせたり、目をぼち／＼瞬いたりしたが、たゞ口癖の、「うん！ うん！ 何ですか？」と呟いただけで、もう窒つて了つた。彼は絶望したやうに手を振つて、それなり口を噤んだ。

妃は隠し切れぬ侮蔑の目をもつて、彼をじろ／＼と見廻すのであつた。シャルルはすつかり敗亡して了つて、目を伏せた。

「ブリソネ、行かう、行かうではないか……うん、どうだ？」

小姓らはさつと扉を押し開いた、シャルルは病室へ入つた。

鎧戸は開かれて、秋の夕べの靜かな光りは、庭木の高い金色の頂き越しに、窓からさし込んでゐた。國王は病人の寢床へ近寄つて、*mon cousin*（我從兄）と呼びかけながら、容體を訊ねた。

ジャン・ガレアツツオは、何とも云へない愛想のいゝ微笑で答へたので、シャルルは忽ち心持が軽くなつて了つた。當惑の念は消え失せて、彼は次第々々に落ついて來た。

「神は陛下に華々しい勝利をお授け下さるでございませう！」何かの話の間に、ガレアツツオはかう云つた。「陛下がエルサレムで、基督のお墓に詣でられましたら、憫れなわたくしの魂のために、お祈りを願ひます。なぜと云つて、その頃にはもうわたくしは……」

「おゝ、なんの、なんの、*mon cousin*、そんな事があつてよいものか、何を仰しやる事やら？ なんのためにそんな……」と王は遮つた。「神様はお慈悲ぶかい。あなたは快くなられるに相違

ない……それどころか、わしと一緒に戦争に出かけて、不信心ものの土耳其人と戦ふやうにならう。まあ、わしの云つた事を憶えてゐて貰ひたい。え？ どうだね？」

ジャン・ガレアツォは首を振つた。

「いゝえ、わたくしなどがどうして、どうして！」

彼は深いためすやうな目つきで、まともに國王の顔を見つめながら、かう云ひ足した。

「陛下、わたくしが死にましたら、どうか子供のフランチェスコと、イサベラを見棄てないで下さいまし。あれは不幸な女で、廣い世界に誰ひとり頼るものがないのです……」

「あゝ、實に、何といふ事だ！」ンヤルルは思ひがけなく、烈しい興奮に襲はれながら、かう叫んだ。厚い脣がびくりと慄へて、その兩隅が下がり、顔ぜんたいが、まるで内部の光りに照されたかのやうに、なみ／＼ならぬ善良な表情を帯びて來た。

彼はつと病人の方へ屈み込み、突發的な愛情を籠めて、抱きしめながら囁いた。

「Mon cousin, mon cher (我が愛するよ……あなたは不仕合せな人だ、可哀さうに！)」

二人はどちらも憐れな病兒のやうに、互につこりほゞ笑み交はした——二人の脣は、兄弟のやうな接吻に結び合はされた。

病室を出ると、王は元老を呼び寄せて、

「ブリソネ、おいブリソネ……どうだ、何とか、その……しなければなるまい……うん？ 一つ加勢をしてやらなければ……あれぢやいけない、あのまゝで打つちやつといぢやいけない……」

わしは騎士だ……保護をしてやらなければならん……よいか？」

「陛下、」と元老は曖昧な返事をした。「あの人はどうせ死んで了ふのでございますから、何とも助けようはありませんまい。たゞこちらの關係を害ねるばかりでございます。モロー公は、わが國と盟約を結んでゐる人でございますから……」

「モローは悪人だ、さうだ、人殺しだ！」と王は叫んだ。その目は義憤に燃えてゐた。

「何とも致し方がございません！」ブリソネは皮肉な、つつましやかな薄笑を浮かべながら、肩を竦めてかう云つた。「モロー公はほかの人と比べて、別に悪くも良くもありません。何事も政略でございますよ、陛下！ わたくしどもはみんな人間でございますから……」

酒番が王の所へ、佛蘭西の酒を一杯もつて來た。酒は彼の心をいき／＼とさせ、陰鬱な想念を拂ひのけて了つた。

酒番と共に、モロー公に仕へる一人の高官が、晚餐へ招待するために入つて來た。王は辭退したが、使者は頻りに懇願するのであつた。けれど、懇願が少しも效を奏さないのを見て取ると、彼はチボリーに近寄つて、何やらその耳に囁いた。こちらは承諾のしるしに頷いて、今度は自分から王にひそ／＼と囁いた。

「陛下、ルクレチヤ様が……」

「うん？ 何？ 何だつて？ ルクレチヤとは誰の事だ？」

「昨夜の舞踏會で、陛下がご一緒にお踊り遊ばした方で。」

「あゝ、なるほど、覚えてるとも覚えてるとも……ルクレチヤ……實に美しい婦人だ！ それで、あの女が晩餐に出席すると云ふのか？」

「是非ご出席になります。そして、陛下のお越しを願つてをられますさうで……」

「願つてをる……それはく！ ところで、どうしたものだらう、チボー！ うん？ お前は どう思ふ？ 事に依つたら……えゝ、どうだつていゝ……どつちにした所で……明日は行軍だ……一つ舞ひ納めとして……どうかモロー公に宜しく。」彼は使者に向つてかう云つた。「そして、 わしは多分その……なにするだらうと、傳言して頂きたい……」

王はチボーを小わきへ引つ張つて行つた。

「一體そのルクレチヤといふのは何者だ？」

「モローの寵女でございます、陛下！」

「モローの寵女、さうかそれは残念だ……」

「陛下、たつた一ことご命令くださいましたら、何もかもこのわたくしが、宜しいやうに取り 計らひます。もし御意とありますれば、今日すぐにでも……」

「いかん、いかん！ どうしてそのやうな事が出来るものか？……わしは客ぢやないか……」

「陛下、モローはかへつて光榮に存じますよ！ 陛下はこゝの人間どもを、ご存じないのでございます……」

「ぢや、どうでもいゝ、どうでもいゝ、なんとも勝手にするがいゝ。これはお前の領分だ……」

……

「陛下、どうぞご安心下さいませ！ たゞ一ことご命令くださいませ……」

「もうしつこく聞くな……わしは嫌ひだ……お前の勝手にしろと、云つたではないか……わし

は何も知らん……お前の好きなやうにしろ……」

チボーは無言のまま低く會釋した。

階段を下りてゐる中に、王は再び顔を顰めて、力ない思想の努力を現はしながら、額をこすつ た。

「ブリソネ、ブリソネ……お前は何と思ふ？……えゝと、わしは何と云はうと思つたのか知らん？ あゝ、さうだ、さうだ……加勢をするのだ……罪もないのに……侮辱を受けて……さういふ事は駄目だ。わしは騎士だ！……」

「陛下、さういふご心配は、さらりと捨ててお了ひなさいませ！ 全くわたくし共は、今それどころではありません。それは後で、土耳其軍を破つてエルサレムを征服した上、芽出たく凱旋の時まで、お延ばしになつた方が宜しうございます。」

「さうだ、さうだ、エルサレム！」と王は呟いた。彼の目は大きく擴がり、唇の上には淡い不明瞭な、夢みるやうな微笑が浮んだ。

「主のみ手は、陛下を戦勝に導いて下さいます。」と、ブリソネは言葉を續けた。「神の指は十字のみ軍に、進路を示して下さるに相違ございません。」

「神の指！ 神の指！」瞳を空へ上げながら、シャルル八世はかう繰返した。

八

それから八日たつて、若い王はこの世を去つた。

死ぬる前に、彼は妃に向つて、レオナルドとの會見を求めたが、彼女は斷乎としてそれを退けた。呪ひを掛けられたものはいつでも、自分に呪ひを掛けた者を見たいといふ、抑制することの出来ない、恐るべき欲望を感じるものだ、老女のドルダがイサベラに吹き込んだのである。

老女は根氣よく病人に蠟の汁を塗り、醫者は最後まで病人を放血術で苦しめた。彼は靜かに死んで行つた。

「汝のみ心の如くならせ給へ！」これが彼の最後の言葉であつた。

モローは故人の亡骸を、パギヤからミラノへ移し、寺院へ飾るやうに命じた。

貴族高官たちはミラノ城へ集つた。ロドギコは甥の時ならぬ最後が、計り知れぬ悲しみの種である由を述べ、正當の相續者であるジャン・ガレアツォの遺子フランチェスコを、王に推戴してはどうかと提議した。一同はこれに反對して、幼年の君主にかゝる大權を委託するのは不可能と力説し、人民全體の名に依つて、是非ともモローに王笏を執つてほしいと切願した。彼は表面的に一應辭退した後、遂に不本意ながらといつた體裁で、人々の懇願に従ふ事とした。人々は錦欄で作つた華麗な袍を彼に捧げた。新王はその袍を纏つて馬に跨がり、「モロー萬歳、

ミラノ王萬歳！」といふ歡聲に、空氣を撼がせる崇拜者の群に取卷かれながら、喇叭の音、祝砲の轟き、寺々の鐘の響き、群衆の沈黙の中を、聖アムブロジオ寺院さして練つて行つた。

ラトウシャ宮殿の南面に當る、ロジヤ・デルオジヤの商業廣場で、町の故老や、法政官や、名士や、總代などの居並らんでゐる前で、先觸が神聖羅馬帝國のマクシミリアヌス帝（一四五三—一五一九年、フリードリッヒ三世の子、最後の騎士の稱あり）よりモロー公に與へられた、『特權狀』が讀み上げられた。

『Maximilianus divina favente clementia Romano:um Rex semper Augustus（仁慈にして柔順なる、神聖羅馬

帝國王マクシミリアヌスは）——一切の地方、土地、都市、村落、城塞、山、牧場、平原、森林、草場、荒地、河川、湖沼、狩獵地、漁場、鹽井、鑛山、侯伯男等各臣下の所領、寺院、教會、教會管區——一切の人ならびに物を、汝ロドギコ・スフォルツァ及び汝の繼承者に授く。而して汝および汝の子、孫、曾孫を、永劫に亘りてロムバルヂヤの獨裁君主たるものと承認し、かつ任命登用選定するものなり。』

幾日かの後、ミラノに於ける最も重大なる聖物を寺院へ遷化する、盛んな祝祭が觸れ出された。それは基督を十字架に磔けた釘の一である。

モローはこの祝祭に依つて民意を迎へ、己れの權力を確定しようと企てたのである。

九

その夜、アレngoの廣場にある獨逸人チバルドの酒場の前で、一團の群衆が集つてゐた。その

中には鉄力屋のスカラプロ、金糸ぬひのマスカレロ、毛皮商のマゾー、靴屋のホルボロ、硝子吹き
のゴルゴリオなども交つてゐた。

群集の眞ん中には、ドミニコ派の僧チモテオが、酒樽の上へ立つて、説教をしてゐる。

「皆の衆、聖エレナがギーナス女神の祠の下から、地中に埋められた十字架の木や、そのほか
主基督の受難の道具類を見つけ出された時、コンスタンチヌス大帝は何よりも有難い、そして恐
ろしい釘を一本お取りになり、鍛冶屋に云ひつけて、それを自分の軍馬の轡に作り直された。
それはつまり、『主の聖物、馬の羈おまがひの上にあらん』といふ、豫言者ザハリイの言葉に適かなはせんが
ためである。で、この筆や言葉に盡されぬ聖物が、羅馬帝國の敵に對する勝利を、大帝に授けて
下すつたものだ。大帝の死後、この釘は行方不明になつてゐたが、それは長い事たつて、メヂオ
ラノ(ミラノ)の大聖者アムヴロシウスが羅馬へ行かれた時、パオリノとかいふ古鐵商の店で見つけ
て、ミラノへ持つて歸られた。それ以來わがミラノの町は、有難い貴い釘の中でも殊に貴い釘、
つまり主が救ひの木の上に昇られた時、始めて右のお掌てのひらを刺し通した釘を、所有する事になつ
た譯だ。釘の長さは丁度五オンチ半ある。だから、羅馬にある釘よりも長くて太い上にさきが
尖つてゐる。ところが、羅馬の方のは先が丸くなつてゐるのだ。この釘が三時間のあひだ、救世
主の掌にあつたといふ事は、學者のアレシオが微妙な三段論法で、いろ／＼と證明してゐる。」
チモテオはちよつと言葉を休めたが、また更に兩手を空へ差上げながら、大きな聲でかう叫ん
だ。

「いや、皆の衆、いま恐ろしい冒瀆が行はれようとしてゐるのだ。人殺しで王座泥棒で悪人の
モローが、罰當りのお祭騒ぎで人民を迷はし、神聖なお釘で自分の怪しい位を固めようとしてゐ
るのだ！」

群衆は急にざはめき始めた。

「さうして、皆の衆は知つてをられるかな。」と、僧は語をついだ。「この釘を伽藍の大圓屋
根の下に當る、祭壇の眞上へ吊り上げる仕掛けを、モローは誰に頼んだと思ひなさる？」

「誰だ？」

「フロレンス人のレオナルド・ダ・ギンチだ！」

「レオナルド？ それは一たい何者だ？」とある者は叫んだ。

「知つてるよ。」とまたある者は答へた。「若殿様を毒の果で殺したやつだ……」

「魔法使だ、邪教徒だ、不信者だ！」

「だが、皆の衆、わしはかういふ話を聞いてるぜ。」ホルボロがおづ／＼と口を入れた。「あ
のレオナルド先生は大變いゝ人で、決して他人に迷惑を掛けず、人間ばかりでなくどんな生きも
のにでも、憫みを掛けるとかいふ事だぜ……」

「黙れ、ホルボロ！ 何くだらん事を云つてるのだ？」

「人のいゝ魔法使なんてあるもんぢやない。」

「おゝ、皆の衆よ、」とチモテオは説明した。「やがていつか人々は、闇の中に来る偉大な誘惑

者の事を、『彼は善良にして幸福なる人、完全無缺の人』と云ひ合ふだらう。なぜと云つて、彼の顔は基督の顔に似て、堅琴のやうに甘い魅惑に富んだ聲を授つてをるからだ。多くの者はその狡猾な慈悲心に惑はされる。ちやうど鷓鴣が詐りの叫び聲で、よその雛を自分の巢へ呼び集めるやうに、彼は天の四風をもつてもろくの民を呼び集めるだらう。皆の衆、ずるぶん用心しなさがいゝ！これは闇の天使だ、反基督と名づけられるこの世の王が、人間の姿をして現はれるのだ。フロレンス人のレオナルドは、反基督のしもべなのだ、先驅者なのだ！」

今までレオナルドの話などまるで聞いた事もない、硝子吹きゴルゴリオは、さも確信あるもののやうに叫んだ。

「本當にさうだ！ あいつは悪魔に魂を賣つて、自分の血で契約を書いた男だ！」

「聖母マリヤ様、どうぞお慈悲にお守りを願ひます！」と古着屋の女房バルバチャが泣き聲を出した。「このあひだ、牢屋の首斬り人の所で桶洗ひをしてゐる、スタムマが話してゐたけれど、そのレオナルドといふ男は、首つり臺から死骸を盗み取つた上、刀で腹を割いて、腸を引出すとかいふ事だよ……夜などは聞くのも恐ろしいやうな話だ。」

「ふん、それはお前などの智慧で、分かる事ぢやないよ、バルバチャ。」とコルボロが仔細らしく口を出した。「それは解剖學といふ學問だよ……」

「何でも鳥みたいな翼でもつて、空を飛び廻る器械を發明したさうだ。」金絲ぬひのマスカロが報告した。

「昔、翼を持つた蛇のエリアール（悪を象徴する字、宙の暗黒の力）も、神に反いて起つた事がある。」とチモテオはまたもや註釋した。「魔術師のシモンもやはり空へ昇つたが、徒使パウロのために墮とされた。」

「海の上をまるで陸地のやうに歩くさうだ。」スカラプロがかう披露した。「主も水の上を歩かれたから、わしも歩くのだ、とこんな罰あたりを云つてるのだ！」

「硝子で作つた鐘の中に入つて、海の底へおりて行く事も出来るよ。」と毛皮商のマゾーが補充した。

「えゝ、兄弟、そんな事を本當にしなさんな！あの男に鐘も何も要るもんかね？ 泳ぎたけりや、すぐ魚にならあ、飛びたけりや、すぐ鳥にならあ！」とゴルゴリオが鐵案を下した。

「本當に何といふ酷い畜生だらう、くたばつて了へばいゝ！」

「一たい審問官の僧正たちは、何だつて黙つて見てるんだらう？ 焚き火へ抛り込んで了へばいゝに！」

「先の尖つた棒でも、喉へ突き立ててやればいゝのさ！」

「あゝ、あゝ、悲しい事だ！」とチモテオは叫んだ。「皆の衆、神聖なお釘は、神聖なお釘はレオナルドの所にあるのだ！」

「そんな事を打つちやつては置けない！」とスカラプロは拳を握り締めながら怒鳴つた。「たとへ死んでも、有難いお釘を穢させはしない。是非あの不信者から取返さなけりやならない！」

「お釘の仇を討たう、殺されたガレアツォ公の仇を討たう！」
 「皆の衆、おまへがたは一體どこへ行くのだ？」と靴屋は両手を拍つた。「今に夜警が廻つて来るぜ。ジュスチーツイ大尉が……」

「ジュスチーツイ大尉なんか、そ食らへだ！ お前、臆病風が吹き出したのならな、コルボロ、鼻の腰巻きの陰にでも隠れてるがい！」

めい／＼棒切れや、杵や、戟や、石などで身を固めて、叫喚や罵詈の聲を上げながら、群衆は街々を走つて行つた。

先頭には僧が十字架を手にして、聖詩を歌ひながら進んだ。

『神よみがへり給ひて敵を蹂躪し、神を憎む者をしてその面前に四散せしめ給へ。』

『煙り消え、蠟の火に熔くる如く、不信のやからを神の面前に滅亡せしめ給へ。』

松脂の把火が濛々と煙りながら、ぱち／＼と爆聲を立てた。そのどす赤い反映の中に、逆さに向けられた鎌のやうな、孤獨な月が蒼白く見えてゐた。静かな星の光りは薄暗くなつて了つた。

10

レオナルドは自分の仕事場で、神聖な釘を宙に吊るす器械の製作に従事してゐた。ゾロアストロは硝子を箆めて、金の後光の射した圓い箱を作つてゐた。この箱に聖物が安置される筈であつた。仕事場の薄暗い片隅には、デオヴンニ・ベルトラフィオが坐つてゐて、とき／＼師の顔をさ

し覗くのであつた。

滑車や槓杆に依る力の傳達の問題に没頭して、レオナルドは器械の事を忘れて了つてゐた。

彼はやつと複雑な計算を終つたばかりである。理智の内部的必然性すなはち數學の法則は、自然の外部的必然性すなはち機械學の法則を證明した。二つの偉大な神祕は、更により大なる一つの神祕に溶け合つた。

『自然の現象ほど單純で美しいものを、彼は靜かな微笑を浮かべながら考へた。『人間はどうしたつて作り出すことは出来ない。神聖な必然性はその法則に依つて、原因から結果を最も近い路を通つて流れ出させるのだ。』

彼の心中には、たつたいま覗いて見た深淵に對する、敬虔な驚異の念が湧き出した。それは、普通に人間の心が經驗し得るほかの感情とは、まるで似ても似つかないものであつた。

彼は手帖の餘白に、神聖な釘を吊り上げる器械の見取圖や、數字や計算などの傍へ、心中に祈禱の響く如く言葉を書きつけた。

『お、根本動力よ、驚くべき汝の公平さよ！ 汝は如何なる力からも、必要なる運動の秩序と性質を奪はうとしなかつた。いかんとなれば、もしある力が百エルの距離に、一つの物體を動かすべき必然性を帯びながら、途中で障害に出あつたとき、打撃の力が残れる距離の代りとして、さまざまな衝動や震撼といふ新しき運動を、生み出すやうに命じたからである——お、根本動力よ、神々しき汝の必然性よ。』

表の戸を烈しく叩く音が響き渡つた。そして聖詩を歌ふ聲や、猛り狂ふ群衆の罵詈雑言が聞えた。

デオヴンニとゾロアストロは、何事が起つたのか見に駆け出した。

料理女のマトゥリナは、たつたいま寢床から飛び起きたらしく、半ば裸體で、髪をぼう／＼させたまゝ、金切り聲を上げながら、部屋の中へ飛び込んだ。

「強盗です！ 強盗です！ 助けて下さい！ 聖母マリヤ様、どうぞお守りくださいまし！ ……」

マルコ・ドジョーネは火繩銃を持つて入つて來ると、大急ぎで窓の鎧戸を閉めて了つた。

「マルコ、あれは何事だ？」とレオナルドは訊ねた。

「知りません。何か悪者どもが、家へ押入らうとしてゐるのです。きつと坊主が、愚民を煽動したのでせう。」

「どうしてほしいと云つてるのだ？」

「半きちがひの馬鹿者らの云ふ事が何で分かりませう！ 有難いお釘を返せと云つてるのです。」

「そんな物はわたしの所にない。あれは大僧正アルチマボルドの寶藏にあるのだ。」

「わたしもそれを云つたのですが、少しも聽かないで暴れてゐるのです。そして先生の事を、ジャン・ガレアツォ公の毒殺人だの、魔法使だの、不信者などと、云ひ散らしてをります。」

往來の叫聲はだん／＼烈しくなつて來た。

「開けろ！ 開けろ！ 開けないと、貴様らの穢らはしい巢を焼き捨てて了ふぞ！ 待つてろ、

レオナルド、今に貴様の身の皮を剥いでくれるから、このいま／＼しい反基督アンチクリストめ！」

「神よみがへり給ひて、敵を蹂躪し……」と僧のチモテオが叫んだ。その歌の聲に、悪戯小僧ファルファニキオの甲高い口笛が交つて聞えた。

仕事場の中へ、小さい下男のチャコポが駆け込んだ。そして、窓仕切りの上へ飛び上つて、鎧戸を開けながら、いきなり庭へ飛び下りようとしたが、レオナルドはその着物の端はしを掴まへた。

「お前はどこへ行くのだ？」

「民ベロキエール警を呼びに行くのです。ジュスチーツイ大尉の夜警隊が、今ごろ近くを通つてゐますから。」

「何を云ふのだ？ 飛んでもない。お前つかまつて殺されて了ふぞ。」

「つかまりやしません！ わたしは塀を越えて、トルーラ叔母さんの家の野菜畑づたひに、牛蒡の生えた濠へ出て、それから裏庭を通つて行きます……もし殺すなら、わたしが殺されます。先生に手を出させはしません！」

愛の籠もつた勇ましい微笑を浮かべながら、レオナルドを振り返ると、少年はその手を摺り抜けて、窓の外へ飛び出した。そして庭から、『きつとお助けします、心配しないでゐらつしやい！』と叫んで、鎧戸をばたりと閉めた。

「まるで悪魔の子みたいな悪戯小僧だが」とマトゥリナは首を振つた。「かういふ難儀の時には役に立つ。本當に助けしてくれるかも知れない……」

二階の窓の一つに石が當つて、硝子の碎ける音がした。

料理女は、さも憐れげな叫び聲を立てて、両手を拍ちながら、部屋の外へ駆け出した。そして、くら闇の中を手探りで、急な穴藏の階子段を傳つて、轉がるやうに下へおりた。後で彼女自身の話した所によると、からの酒樽の中へ潜り込んで、もし人が引出してくれなかつたら、朝までもそこにちつとして居かねなかつたのである。

マルコは二階の鎧戸を閉めに駆け昇つた。

デオヴンニは仕事場へ歸つて来た。そして、一切のものに無關心な、悄然とした蒼い顔をして、再びもとの片隅へ坐り込まうとしたが、レオナルドの顔をちつと見て傍へ寄り、いなきりその前へ膝を突いた。

「一體どうしたのだ？ 何か頼みでもあるのか、デオヴンニ！」

「先生、世間の噂では……それが嘘だといふ事は、わたしも知つてゐます……わたしは本當にしません……がどうか聞かして下さい……後生だから、ご自分の口から聞かして下さい！」

彼は興奮の餘り、しまひまで云ひ終らなかつた。

「お前は」とレオナルドは、痛ましい微笑を浮べつつ、かう云つた。「世間でわたしを人殺しだと云つてゐるが、本當かどうか疑つてゐるのだらう？」

「たつた一こと、先生、たつた一こと、ご自身の口から聞かせて下さい！……」

「わたしに何を云ふ事が出来よう？ それにそんな必要はない。お前が一たん疑ふ氣を起した以上、どうしたつて本當にしないのだから……」

「お、レオナルド先生！」とデオヴンニは叫んだ。「わたしは何とも云へないほど苦しんだのです。わたしは自分がどうなつて行くのか、自分でも分かりません……わたしは氣が狂ひさうです、先生……助けて下さい！ 可哀さうだと思つて下さい！ わたしはもうこれ以上たへ切れません……どうかあれは嘘だと云つて下さい！」

レオナルドは無言であつた。

やがてくるりと横を向いて、慄へる聲でかう云つた。

「お前も彼らと一緒になのだ。お前もわたしの敵なのだ！……」

この時、家も慄ふかと思はれるやうな、轟然たる物音が聞えた。鉞力屋のスカラプロが、斧で戸を打碎いてゐるのであつた。

レオナルドは群衆の叫びに耳を傾けた。と、彼の胸は、これまで経験し馴れた靜かな哀愁——限らない孤獨の感情に、締めつけられるのであつた。

彼は頭を垂れた。すると彼の目は、たつたいま書いたばかりの、數行の文字の上にふと落た。

『お、根本動力よ、驚くべき汝の公平さよ！』

「さうだ。」と彼は考へた。「すべては善いのだ、すべては『汝』から來てゐるのだ！」

彼はにっこり笑った。そして、大いなる誇りをもつて、瀕死のジャン・ガレアッツォ公の言葉を繰返した。

『天に於ける如く地に於いても、汝のみ心の如くならせ給へ。』

昭和十年二月十五日印

印刷行

神々の復活 (一) ★★

定価四十銭

(履本製本)

岩波文庫 1083-1084

10.2.19

発行所

東京市神田区一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話一〇一八七・〇一八八
九段一〇二二番(小賣部専用)番
振替口座東京二六二四〇番

譯者

米川正夫

發行者

東京市神田区一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議の際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 新訓 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***
新訓 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***
白文 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***
白文 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***
古事 記 幸田成友校訂 *
新訓 日本書紀 上卷 黒板勝美編 **
新訓 日本書紀 中卷 黒板勝美編 ***
新訓 日本書紀 下卷 黒板勝美編 ***
訓 日本書紀 下卷 黒板勝美編 ***
訓 日本書紀 下卷 黒板勝美編 ***
訓 日本書紀 下卷 黒板勝美編 ***
古語 拾遺 加藤玄智校訂 *
水鏡 和田英松校訂 *
大鏡 和田英松校訂 *
增鏡 和田英松校訂 *
神皇正統記 山田孝雄校訂 ***

- 三條西榮花物語 上卷 三條西公正校訂 ***
三條西榮花物語 中卷 三條西公正校訂 ***
三條西榮花物語 下卷 三條西公正校訂 ***
家本 三條西榮花物語 卷下 三條西公正校訂 ***
考伊勢物語 語 皇代弘賢校訂 *
竹取物語 並附錄 島津久基校訂 *
保元物語 語 岸谷誠一校訂 *
平治物語 語 岸谷誠一校訂 *
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ***
平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ***
十六夜日記 玉井幸助校訂 *
源氏物語 (一) 島津久基校訂 ***
源氏物語 (二) 島津久基校訂 ***
源氏物語 (三) 島津久基校訂 ***
源氏物語 (四) 島津久基校訂 ***
源氏物語 (五) 島津久基校訂 ***
土佐日記 池田龜鑑校訂 *
紫式部日記 池田龜鑑校訂 *

- 更級日記 西下經一校訂 *
枕草子 (春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂 ***
枕草子 (春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂 ***
枕草子 (春曙抄) 下卷 池田龜鑑校訂 ***
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 *
梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂 *
古今和歌集 尾上八郎校訂 ***
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ***
新古今和歌集 增補 齋藤茂吉校訂 ***
新金槐和歌集 齋藤茂吉校訂 ***
中世歌論集 久松潜一編 ***
藤原定家集 附定家 佐佐木信綱校訂 ***
法華義疏 上卷 聖徳太子御製 花山信勝校訂 ***
法華義疏 下卷 聖徳太子御製 花山信勝校訂 ***
法華義疏 下卷 聖徳太子御製 花山信勝校訂 ***
上人愚迷發心集 高瀬承殿校註 ***
正法眼藏隨聞記 和辻哲郎校訂 *
日蓮上人文抄 姊崎正治校註 ***

一遍上人語錄 藤原正校註
 夢中問答 佐藤泰壽校註
 歎異抄 金子大梁校註
 徒然草 西尾實校註
 方丈記 山田孝雄校註
 花傳書 世阿彌校註
 申樂談 義野上豊一校註
 能作書・覺習條條 世阿彌校註
 至花道 野上豊一校註
 入木道三部集 阿彌校註
 奥の細道その他 伊藤松字校註
 芭蕉七部集 伊藤松字校註
 芭蕉連句集 小宮豊隆編
 芭蕉書翰集 勝峯晋風編
 芭蕉俳句集 源原退蔵校註
 註芭蕉俳句集 源原退蔵校註
 燕村七部集 伊藤松字校註
 風俗文選 伊藤松字校註
 鶉衣 石田元季校註

おらが春・我春集 一茶 萩原井泉水校註
 遺稿父の終焉日記 萩原井泉水校註
 俳柳多留 上卷 西原柳雨校註
 俳柳多留 中卷 西原柳雨校註
 俳柳多留 下卷 西原柳雨校註
 萬載狂歌集 野崎左文校註
 徳和歌後萬載集 野崎左文校註
 松の葉 藤田徳太郎校註
 松の葉 藤田徳太郎校註
 閑吟集 附狂言小歌集 藤田徳太郎校註
 好色一代男 西田萬吉校註
 好色一代女 西田萬吉校註
 好色五人女 西田萬吉校註
 日本永代藏 西田萬吉校註
 世間胸算用 西田萬吉校註
 西鶴織留 西田萬吉校註
 武家義理物語 西田萬吉校註

武道傳來記 和田萬吉校註
 西鶴諸國 西田萬吉校註
 本朝櫻陰比事 西田萬吉校註
 椿説弓張月 上卷 和田萬吉校註
 椿説弓張月 中卷 和田萬吉校註
 椿説弓張月 下卷 和田萬吉校註
 國性爺合戦 近松門左衛門作
 會我合 近松門左衛門作
 心中天の網 近松門左衛門作
 胡蝶物語 和田萬吉校註
 浮世風呂 和田萬吉校註
 浮世床 和田萬吉校註
 東海道膝栗毛 十返舎一九作
 酒落本集 高木好次校註
 雨月物語 上田秋成作
 玉勝間(上) 本居宣長校註
 玉勝間(下) 本居宣長校註
 玉屋山問 本居宣長校註
 鈴屋山問 本居宣長校註
 秘木玉くし 本居宣長校註

註良寛詩集 大島花東譯註
 加賀 阿彌校註
 赤垣源藏・仲光 阿彌校註
 忍屋の戀 阿彌校註
 縮屋新助 阿彌校註
 孝子善吉 阿彌校註
 鼠小僧 阿彌校註
 實録先代萩 阿彌校註
 おお森 阿彌校註
 笠森 阿彌校註
 辨天小僧 阿彌校註
 鳩の平右衛門 阿彌校註
 小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論

硝子戸の中 夏目漱石著
 明暗 夏目漱石著
 明暗 下巻 夏目漱石著
 五重塔 幸田露伴著
 風流佛・一口劍 幸田露伴著
 自然と人生 徳富蘆花著
 二人女 房尾崎紅華著
 觀音岩 前篇 川上眉山著
 觀音岩 後篇 川上眉山著
 にこり 樋口一葉著
 たけくらべ 樋口一葉著
 うたかたの記(他三篇) 森 顯外著
 護持院ケ原の敵討 森 顯外著
 新曲浦 島坪内逍遙著
 新曲映 島坪内逍遙著
 運命論者 他二篇 岡本獨歩著
 源をぢ 他二篇 岡本獨歩著
 號 外他六篇 岡本獨歩著
 櫻の實の熟する時 島崎藤村著

千曲川のスケッチ 島崎藤村著
 飯倉だより 島崎藤村著
 春を待ちつつ 島崎藤村著
 生ひ立ちの記 島崎藤村著
 蒲團・一兵卒 田山花袋著
 田舎教師 田山花袋著
 風流懺法 他三篇 高濱虚子著
 宣言 有島武郎著
 小僧の神様 他十篇 志賀直哉著
 和解 或る死 志賀直哉著
 陸奥直次郎 長興善郎著
 青銅の基督 長興善郎著
 偷盜 芥川龍之介著
 侏儒の言葉 芥川龍之介著
 河 童 芥川龍之介著
 厭世家の誕生 日 佐藤春夫著
 入江のほとり 正宗白鳥著

生まざりしならば 正宗白鳥著★
 大石良雄 野上彌生子著★
 海神 丸野土彌生子著★
 出家とその弟子 倉田百三著★
 布施太子の入山 倉田百三著★
 幸福者 武者小路實篤著★
 その妹 武者小路實篤著★
 人間萬歳 武者小路實篤著★
 友情 武者小路實篤著★
 煤煙 森田草平著★
 波 山本有三著★★★
 病牀六尺 正岡子規著★★★
 墨汁一滴 正岡子規著★★★
 仰臥漫錄 正岡子規著★★★
 子規歌集 正岡子規著★
 左千夫歌集 土屋文明選★
 左千夫歌論抄 土屋文明編★★★

長塚節歌集 齊藤茂吉選★★★
 上田敏詩抄 茅野蕭々編★★★
 晚翠詩抄 土井晚翠著★★★
 藤村詩抄 島崎藤村自選★★★
 有明詩抄 澤原明著★★★
 泣菫詩抄 薄田泣菫著★★★
 白秋詩抄 北原白秋著★★★
 白秋抒情詩抄 北原白秋著★★★
 文道遙遺稿 金築松桂譯★★★
 歌舞音樂略史 小中村清炬著★★★
 俗樂旋律考 上原六四郎著★
 蘭學事始 杉田玄白著★
 茶の 岡倉覺三著★
 綱島梁川集 安倍能成編★★★
 清澤文集 清澤滿之著★★★
 福澤撰集 福澤諭吉著★★★
 寒 陸奥宗光著★★★

北村透谷集 島崎藤村編★★★
 海舟座談 巖本善治編★★★
 外國文學(小説・戯曲・詩)
 註譯 杜 詩卷之一 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 杜 詩卷之二 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 杜 詩卷之三 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 杜 詩卷之四 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 陶淵明集 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 唐詩選上卷 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 唐詩選(附作者傳) 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 李太白詩選上卷 漆山又四郎譯註★★★
 註譯 李太白詩選下卷 漆山又四郎譯註★★★
 寒山詩 太田梯藏譯註★★★
 支那通俗古今奇觀 淡主人譯★
 朝鮮童謠選 金素雲譯編★★★
 朝鮮民謠選 金素雲譯編★★★

即興詩人 上卷 森 鷗外譯★★★
 即興詩人 下卷 森 鷗外譯★★★
 繪なき繪本 アンデルセン作★
 ブラウン ドイブセン作★★★
 キイランド短篇集 前田 晁譯★
 村のロメオとユリア ケララ作★
 アルプスの山の娘 ヨハンナ・スピリ作★
 幽霊曲 ストリンツベルク作★
 稲妻 小宮豊隆譯★
 父 小宮豊隆譯★
 令嬢 ユリ エストリントベルク作★
 大海のほとり ストリンツベルク作★
 鳥の農民 ストリンツベルク作★
 オネーギン フーシエキン作★
 スペードの女王 ブーシエキン作★
 (他一篇) 神西 清譯★
 イワン・ニキフオロ ゴーゴリ作★
 とイワン・ニキフオロ 原久一郎譯★
 キッチとが喧嘩をした話 原久一郎譯★
 外 套 他二篇 伊吹山次郎譯★

昔氣質の地主たち 伊吹山次郎譯★
 檢察官 ゴーゴリ作★
 現代のヒーロー 中村白葉譯★
 皇帝フョードル ア・カトルストイ作★
 初恋 ツルゲーネフ作★
 トウルフ散文詩 神西 清譯★
 プウニンとバプリン トウルフ作★
 罪と罰 第一卷 中村白葉譯★
 罪と罰 第二卷 中村白葉譯★
 罪と罰 第三卷 中村白葉譯★
 カラマーゾフの兄弟 第一卷 米川正夫譯★
 カラマーゾフの兄弟 第二卷 米川正夫譯★
 カラマーゾフの兄弟 第三卷 米川正夫譯★
 カラマーゾフの兄弟 第四卷 米川正夫譯★
 悪霊 第一編 米川正夫譯★
 悪霊 第二編(上) 米川正夫譯★
 悪霊 第二編(下) 米川正夫譯★
 悪霊 第三編 米川正夫譯★

貧しき人々 フストエフスキイ作★
 永遠の良人 フストエフスキイ作★
 戦争と平和 第一卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第二卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第三卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第四卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第五卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第六卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第七卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第八卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第九卷 米川正夫譯★
 戦争と平和 第十卷 米川正夫譯★
 結婚の幸福 米川正夫譯★
 光あるうちに 米川正夫譯★
 クロイツェル・ソナタ 米川正夫譯★
 復活 上卷 中村白葉譯★
 復活 中卷 中村白葉譯★
 復活 下卷 中村白葉譯★
 闇の力 トルスタイ作★
 生ける屍 米川正夫譯★

幼年時代 米川正夫 譯
少年時代 米川正夫 譯
トルストイ民話集 中村白葉 譯
人は何で生きるか他四篇 中村白葉 譯
トルストイ民話集 中村白葉 譯
イワンの馬鹿他八篇 中村白葉 譯
藝術とはどういふものか 河野與一 譯
ソニーヤ・コヴァヤ 野上彌生子 譯
レフス・カヤ 野上彌生子 譯
接吻・可愛い女他三篇 原久一 譯
シベリヤの旅他三篇 神西清 譯
櫻の園 米川正夫 譯
伯父ワニーヤ 米川正夫 譯
三人姉妹 米川正夫 譯
幼年時代 湯淺芳子 譯
サニーニ 上巻 アルツハイシエフ 中村白葉 譯
サニーニ 下巻 アルツハイシエフ 中村白葉 譯
賢者ナータン 大庭米治郎 譯
ヘルマンとドロテア 佐藤通次 譯
ギル・ヘルス・マイスター 上巻 林久男 譯

ギル・ヘルス・マイスター 下巻 林久男 譯
フアウスト第一部 森岡外 譯
フアウスト第二部 森岡外 譯
若いエルテルの悩み 茅野蕭々 譯
たくみと戀 實吉捷郎 譯
ヴレンシニクイン 鼓常良 譯
ヴィルヘルム・テル 櫻井政隆 譯
黄金寶壺 石川道雄 譯
ハルツ紀行 内藤匡 譯
全グリム童話集第一 金田鬼一 譯
全グリム童話集第二 金田鬼一 譯
全グリム童話集第三 金田鬼一 譯
全グリム童話集第四 金田鬼一 譯
全グリム童話集第五 金田鬼一 譯
全グリム童話集第六 金田鬼一 譯
全グリム童話集第七 金田鬼一 譯
ゲエテと對話抄 エツケルマン 著 龜尾英四郎 譯

希臘の春 ハウプトマン 譯
ソアーナの異教徒 ハウプトマン 譯
日の出 橋本忠夫 譯
沈 鐘 阿部六郎 譯
改春の目ざめ 野上彌生子 譯
平 行 久保 榮 譯
埋 木 森 譯
祖 維納の辻音楽師 石川録次 譯
みれ 妮 岡本修助 譯
アナトール 小宮豊隆 譯
青い鳥 若月紫蘭 譯
ポリウクト 木村太郎 譯
人間嫌ひ 木村太郎 譯
マノン・レスコー 河盛好藏 譯

スタン 赤と黒上巻 桑原武夫 譯
スタン 赤と黒下巻 桑原武夫 譯
ダール 赤と黒上巻 水野亮 譯
ダール 赤と黒下巻 水野亮 譯
従兄ボンズ 上巻 水野亮 譯
従兄ボンズ 下巻 水野亮 譯
知られざる傑作 (他五篇) 水野亮 譯
海邊の悲劇他三篇 水野亮 譯
カールメン 杉捷夫 譯
コロロンパ 杉捷夫 譯
エトルリアの壺 (外五篇) 杉捷夫 譯
椿の一生 吉村正一郎 譯
女の一生 杉捷夫 譯
ア・ノ・ア 前川堅市 譯
水のの 上 吉江喬松 譯
ピエルとジャン 前田晃 譯
生の誘惑 (原名イヴ) 前田晃 譯
モウパッサン短編集 (他七篇) 前田晃 譯
お菊さん 野上豊一郎 譯

水島の漁夫 ビエル・ロチ 著 吉江喬松 譯
若き日の手紙 外山樞夫 著 藤田佐 譯
風車小屋たより 藤田佐 著 藤田佐 譯
陽気なタルタラン 小川泰一 著 小川泰一 譯
プチ・ショウズ 八木さわ子 著 八木さわ子 譯
アトール・フランス短編集 (他四篇) 大井 征 譯
愛と死との戯れ 片山敏彦 著 片山敏彦 譯
獅子座の流星群 片山敏彦 著 片山敏彦 譯
法王廳の抜穴 石川淳 著 石川淳 譯
田園交響樂 川口篤 著 川口篤 譯
クオレ 愛の上巻 前田晃 著 前田晃 譯
クオレ 愛の下巻 前田晃 著 前田晃 譯
恐ろしき媒 永田寛定 著 永田寛定 譯
作り上げた利害 永田寛定 著 永田寛定 譯
子守唄 永田寛定 著 永田寛定 譯
希臘羅馬神話 野上彌生子 著 野上彌生子 譯
フォースタス博士 松尾相 譯

パインズ詩集 中村爲治 譯
あしながおぢさん 藤藤子 著 藤藤子 譯
自然論 片上伸 著 片上伸 譯
緋文宇 佐藤清 著 佐藤清 譯
エヴァンジェリン 藤藤子 著 藤藤子 譯
ホキット草の葉 有島武郎 著 有島武郎 譯
マン詩集 森村 著 森村 譯
ボウ黒猫 (他六篇) 森村 著 森村 譯
王子と乞食 村岡花子 著 村岡花子 譯
クリスマス・カール 森田草平 著 森田草平 譯
ブラウサウル 齋藤勇 著 齋藤勇 譯
ラム沙翁物語 野上彌生子 著 野上彌生子 譯
新アラビヤ夜話 佐藤清 著 佐藤清 譯
フレイク抒情詩抄 藤藤子 著 藤藤子 譯
闘技者サムソン 中村爲治 著 中村爲治 譯
イノック・アーデン 入江直祐 著 入江直祐 譯
イン・メモリアム 入江直祐 著 入江直祐 譯

ハルディ短編集 森村 豊 著 ★★
 幻想を追ふ女(他六篇) 森村 豊 著 ★★
 小公 子 若松 暎子 著 ★★
 聖女(チヤヌ・ダルク) 野上 豊一 著 ★★
 人と超人 市川 又彦 著 ★★
 鰥夫の家 市川 又彦 著 ★★
 (思想の達し限る限り) 相良 徳三 著 ★★
 (原名メトセラ時代に轉れ) 相良 徳三 著 ★★
 ビータ・パン 本多 顯彰 著 ★★
 静寂の宿 本多 顯彰 著 ★★
 争 闘 石田 幸太郎 著 ★★
 マンスフィールド 崎山 正毅 著 ★★
 短篇集 崎山 正毅 著 ★★
 ユリシイズ(一) チエムズチヨイス 著 ★★
 (森田・名原他四名譯) 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ(二) チエムズチヨイス 著 ★★
 (森田・名原他四名譯) 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ(三) チエムズチヨイス 著 ★★
 (森田・名原他四名譯) 森田・名原他四名譯 ★★
 ユリシイズ(四) チエムズチヨイス 著 ★★
 (森田・名原他四名譯) 森田・名原他四名譯 ★★

フアラプロタゴラス 菊池 豊一 著 ★★
 カン純粋理性批判上巻 天野 貞祐 著 ★★
 (改訂版) 天野 貞祐 著 ★★
 カン実践理性批判 波多 祥精 著 ★★
 宮本 和吉 著 ★★
 カンプロレゴメナ 天野 貞祐 著 ★★
 小尾 節治 著 ★★
 スピノザ 哲学體系 小尾 節治 著 ★★
 スピノザ 知性改善論 島中 尚志 著 ★★
 哲学とは何か、ウインデルバンド 著 ★★
 イマヌエル・カント 河 東 涓 著 ★★
 歴史と自然科学・道 藤田 英雄 著 ★★
 徳の原理に就て 藤田 英雄 著 ★★
 認識の對象 山内 得立 著 ★★
 七大哲人 安倍 能成 著 ★★
 人間機械論 杉 捷夫 著 ★★
 ヒューム人性論 太田 善男 著 ★★
 人間の精神 立花 祐雄 著 ★★
 心理學原論 大 塚 義一 著 ★★
 科學の價值 田 邊 元 著 ★★
 科學と方法 吉田 洋一 著 ★★
 科學者と詩人 平林 初之輔 著 ★★

將來の哲學の 植村 晋六 著 ★★
 根本命題 植村 晋六 著 ★★
 ヘーゲル哲學の批判 佐野 文夫 著 ★★
 (他一篇) 佐野 文夫 著 ★★
 史内に見たる 寺田 實彦 著 ★★
 科學的宇宙觀の變遷 寺田 實彦 著 ★★
 フアラデー 矢島 祐利 著 ★★
 蠟燭の科學 矢島 祐利 著 ★★
 アルプスの氷河第一部 矢島 祐利 著 ★★
 アルプスの氷河第二部 矢島 祐利 著 ★★
 チンアルプスの旅より 矢島 祐利 著 ★★
 チンアルプス紀行 矢島 祐利 著 ★★
 自然認識の限界につ 坂田 徳男 著 ★★
 いて・宇宙の七つの謎 坂田 徳男 著 ★★
 自然に於ける美 ソロウイヨフ 著 ★★
 藝術の一般的意義 高村 理智夫 著 ★★
 自然美と其驚異 板倉 勝忠 著 ★★
 ラプラタの博物學者 岩田 良吉 著 ★★
 ケーベル博士隨筆集 久保 勉 著 ★★
 カントとゲエテ 谷川 徹三 著 ★★
 フーブル昆蟲記 山田 吉彦 著 ★★

第十分冊・第十二分冊・第十三分冊
 第十四分冊・第十七分冊・第十八分冊
 第二十分冊
 チャールズ・ダーウキン 小泉 丹 著 ★★
 種の起原 上巻 小泉 丹 著 ★★
 人及び動物の 小泉 丹 著 ★★
 表情について 小泉 丹 著 ★★
 雜種植物の研究 小泉 丹 著 ★★
 生命の不思議 上巻 後藤 格次 著 ★★
 生命の不思議 下巻 後藤 格次 著 ★★
 生命の不思議 下巻 後藤 格次 著 ★★
 世界人類史物語 上巻 鈴木 厚 著 ★★
 世界人類史物語 下巻 鈴木 厚 著 ★★
 世界人類史物語 下巻 鈴木 厚 著 ★★
 回想のセザンヌ 有馬 生馬 著 ★★
 この人を見よ 安倍 能成 著 ★★
 ミル 自 傳 西本 正美 著 ★★
 ホワロー 詩 學 丸山 和馬 譯 註 ★★
 佛蘭西文學史 序 邦 根 秀 雄 著 ★★
 佛蘭西文學史 上巻 邦 根 秀 雄 著 ★★
 伊太利文學復興期の 上巻 村松 恒一 著 ★★
 文化 上巻 村松 恒一 著 ★★
 ベーター 論集 田部 重治 譯 ★★

ラフカディオ 東西文學評論 十一卷 谷 義三 著 ★★
 オ・ヘルン 三宅 義三 著 ★★
 文學史の方法 瀧 沼 茂 樹 著 ★★
 戀愛論 上巻 前川 堅市 著 ★★
 戀愛論 下巻 前川 堅市 著 ★★
 戀愛と結婚 上巻 原 田 實 著 ★★
 戀愛と結婚 下巻 原 田 實 著 ★★
 (改訂版) 原 田 實 著 ★★
 基督者の自由 石 原 謙 著 ★★
 イミタシヨ・クリス 内村 達三 著 ★★
 (基督のまねび) 内村 達三 著 ★★
 聖アウグスティン 内村 達三 著 ★★
 スチスス懺悔錄全譯 内村 達三 著 ★★
 アウグスティンのフォン・ハルナック 著 ★★
 懺悔 山 谷 省 吾 著 ★★
 唯一者と其の所有 上 草 間 平 作 著 ★★
 唯一者と其の所有 下 草 間 平 作 著 ★★
 エミール(第一篇) 平林 初之輔 著 ★★
 エミール(第二篇) 平林 初之輔 著 ★★
 エミール(第三篇) 平林 初之輔 著 ★★
 エミール(第四篇) 平林 初之輔 著 ★★

エミール(第五篇) 平林 初之輔 著 ★★
 懺悔 上巻 石川 巖 著 ★★
 懺悔 中巻 石川 巖 著 ★★
 懺悔 下巻 石川 巖 著 ★★
 人間不平等起原論 本 田 喜 代 治 著 ★★
 人 生 論 中 村 白 葉 著 ★★
 獨逸國民に告ぐ 大 津 康 著 ★★
 内村鑑三隨筆集 内村 鑑 三 著 ★★
 手島堵庵心學集 白 石 正 邦 編 著 ★★
 文明論之概略 瀧 澤 論 吉 著 ★★
 日本開化小史 田 口 卯 吉 著 ★★
 論 畫 四 種 坂 崎 坦 編 著 ★★
 論 語 武 内 義 雄 譯 註 ★★
 孔子家語 藤 原 正 校 譯 註 ★★
 菜 根 譚 山 口 察 常 譯 註 ★★
 報 德 記 富 田 高 慶 述 著 ★★
 二宮翁夜話 福 住 正 兄 筆 記 著 ★★

法律・社會・政治・經濟

アリストテレスの國家	原 隨 園 譯	★
法の精神 上卷	モンテスキエ著 宮澤俊義譯	★★
法の精神 下卷	モンテスキエ著 宮澤俊義譯	★★
慣習と權利	青山道夫著 日沖憲郎譯	★
權利のための闘争	イェーリング著 日沖憲郎譯	★
民 約	平林初之輔著	★
暴 力 論 上卷	ソレル著 木下平治譯	★★
暴 力 論 下卷	ソレル著 木下平治譯	★★
暴 力 論 上卷	ソレル著 木下平治譯	★★
暴 力 論 下卷	ソレル著 木下平治譯	★★
國 富 論 上卷	スミス著 氣賀勲重譯	★★
國 富 論 下卷	スミス著 氣賀勲重譯	★★
勞働者綱領	小泉信三譯註	★
哲學の貧困	木下平治著 淺野見譯	★★
資本論初版鈔	マルクス著 長谷部文雄譯	★★
資本論第二版鈔	マルクス著 久留間敏造譯	★★
自然辯證法上卷	エンゲルス著 加古祐二譯	★★
自然辯證法下卷	エンゲルス著 加古祐二譯	★★

婦 人 論 上卷	草間平作譯	★★
婦 人 論 下卷	草間平作譯	★★
婚姻の諸形式	ミューラー著 木下史郎譯	★★
近代民主政治 一	ブライト著 武松譯	★★
近代民主政治 二	ブライト著 武松譯	★★
近代民主政治 三	ブライト著 武松譯	★★
近代民主政治 四	ブライト著 武松譯	★★
近代民主政治 五	ブライト著 武松譯	★★
ユートピア (理想郷)	トマス・モア著 本多顯彰譯	★★
社會學上より見たる「藝術」第一部	大西克禮譯	★★
社會學上より見たる「藝術」第二部上	大西克禮譯	★★
社會學上より見たる「藝術」第二部下	大西克禮譯	★★
經濟要録	佐藤信淵著 龍本誠一校訂	★★
鐵 論	曾我部靜雄譯註	★★

住宅問題

住宅問題	エンゲルス著 加田哲二譯	★★
家族の起源	エングルス著 喜多野清一譯	★
フオリエルバツハ論	エンゲルス著 佐野文夫譯	★
反デューリング論 上卷	エンゲルス著 長谷部文雄譯	★★
反デューリング論 下卷	エンゲルス著 長谷部文雄譯	★★
マルクス・エンゲルス傳	リヤヂノフ著 長谷部文雄譯	★★
資本論解説 上卷	カウツキー著 大里傳平譯	★★
資本論解説 下卷	カウツキー著 大里傳平譯	★★
ブルジョアの手紙	ルイゼ・カウツキー編 松井圭子譯	★★
ブルジョアのイデオロギー	リヤヂノフ編 三木清譯	★★
プレハブヘーゲル論	笠信太郎譯	★

レニ帝國主義

レニ帝國主義	長谷部文雄譯	★★
レニ唯物論と經驗批 上卷	佐野文夫譯	★★
レニ唯物論と經驗批 中卷	佐野文夫譯	★★
レニ唯物論と經驗批 下卷	佐野文夫譯	★★
レニ何を爲すべきか	平田良備譯	★★
戦争論 上卷	クラウゼヴィッツ著 馬込健之助譯	★★
戦争論 下卷	クラウゼヴィッツ著 馬込健之助譯	★★
ケネー經濟表	増井幸雄譯	★
ケネー經濟表	戸田正雄譯	★
經濟學及課税之原理	リカアド著 小泉信三譯	★★
經濟的財價值	ポエム・パウエル著 長守善譯	★★
道徳的經濟的基礎	シュクウディング著 草間平作譯	★★
建築の七燈	ラスキン著 高橋松川譯	★★
この後の者にも	ラスキン著 西本正美譯	★★
地 代 論	ロッドベルトウ著 山口正吾譯	★★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。

□内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。

□最低の廉價 出来るだけ安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を含める形式を採りました。

□購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。

□體裁は菊半截判、紙装、平福百穂畫伯装幀。

□活字は八ポイントを用ひました。

□約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

□番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。

□定價(及送料)は左表の通りです。

定價二十錢	送料二錢
★★	四十錢
★★★	六十錢
★★★★	八十錢
★★★★★	一圓

□御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なので必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

2/2/2

新刊書目

ゴチユル富に關する省察 永田清譯註 ★

神皇正統記 山田孝雄校訂 ★★

秘玉くしし本玉くしし げげ 村岡典嗣校訂 ★

維納の辻音樂師 石川鍊次譯 ★

フアール昆蟲記(第五分冊) 山田達夫譯 ★★

手島堵庵心學集 白石正邦編 ★

慣習と權利 ヴイノグラドフ著 青山道夫譯 ★

パルムの僧院上卷 スタンダアル作 前川堅市譯 ★★

レニンのゴオリキーへの手紙 中野重治譯 ★

松浦宮物語 蜂須賀笛子校訂 ★

日本道德論 西村茂樹著 吉田熊次校訂 ★

都鄙問答 石田梅巖著 足立栗園校訂 ★

鳩翁道話 石川謙校訂 ★★

ロイザ・ルグ資本蓄積再論 長谷部文雄譯 ★★

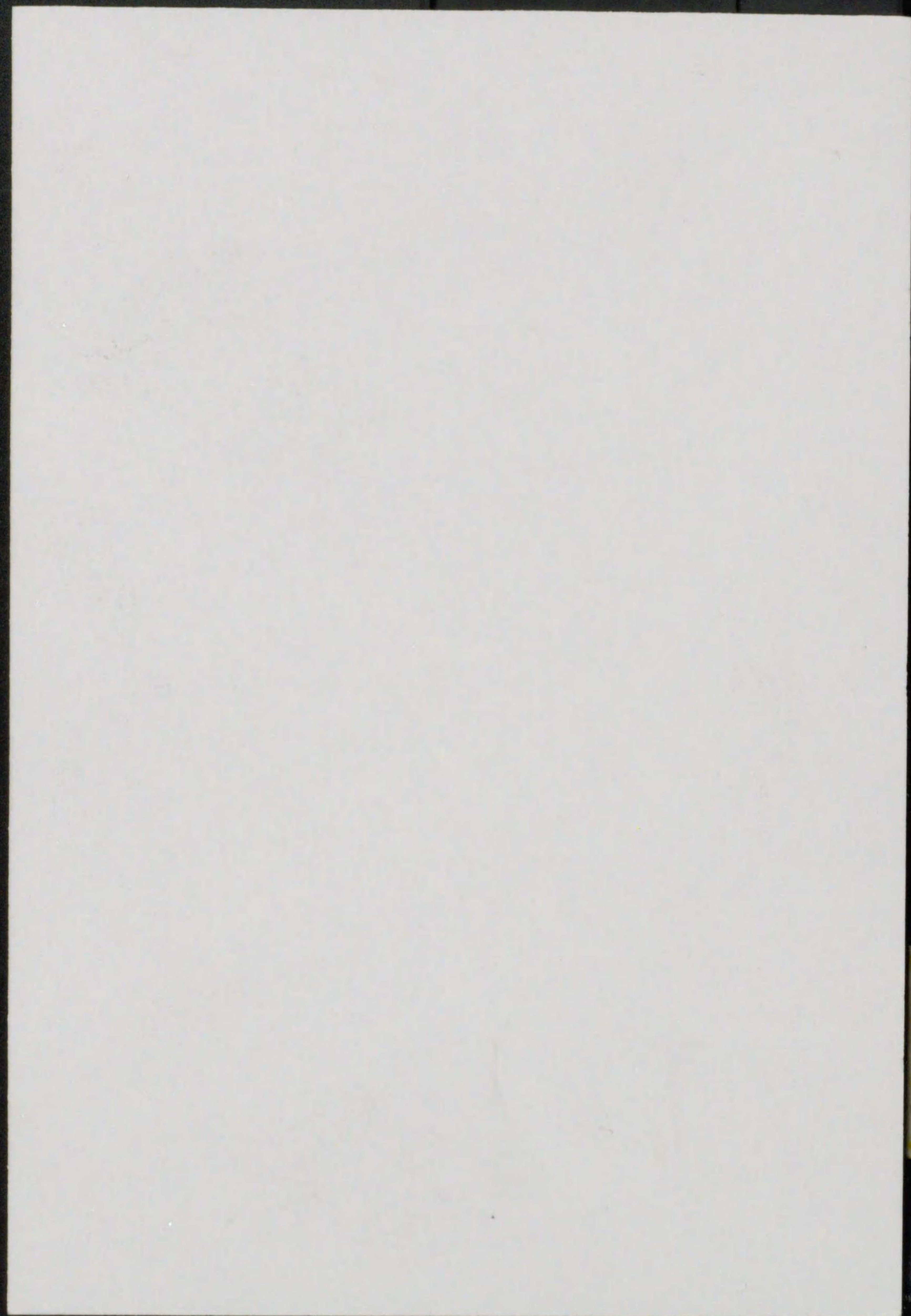
祝詞・壽詞 千田憲編 ★

神々の復活(一) メレジュコーフスキイ作 米川正夫譯 ★★

新一茶俳句集 萩原井泉水編 ★

569

14

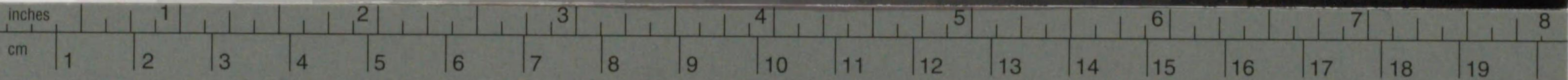


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

